

平成30年度

公立大学法人広島市立大学の業務実績に係る評価結果

令和元年8月

広島市公立大学法人評価委員会

公立大学法人広島市立大学 平成 30 年度業務実績に係る評価

全体評価

評価の記号

A：法人の業務は、中期計画の達成に向けて順調に実施されている。

評価コメント

平成 30 年度は第 2 期中期計画の 3 年目に相当する。この間に集積してきた成果のためか、広島市立大学が大きく変貌を遂げてきたことを実感する。長年かけて準備を進めてきた全学共通教育の「3 学部合同基礎演習」と「国際学生寮さくら」が活動期に入り、様々な創意工夫が開花した。また、「大学院平和学研究科」の第 1 期生の募集が開始された。さらに、高大接続の円滑化を目指す入試改革や学部・大学院のカリキュラム改革にも抜本的に取り組んでいる。また、個別多様に展開されてきた学生の課外活動に対する支援も「総合教育センター」所管事業と位置づけ、カリキュラムを補完する横串の教育活動として整備していく方針が立てられ、具体化に向けた検討が進められている。

このように、学長はじめ執行部のリーダーシップの下、全学的に教育改革に対する積極的な意欲と姿勢が感じられ、学生の人間形成を中心に据えた広島市立大学らしさを一段と魅力的なものとする努力が積み重ねられている。全体として平成 30 年度も年度計画を上回る実績を上げていると評価される。

個別項目では、「全学共通教育の充実」、平和関連教育などの「特色ある教育内容の充実」、「日本人学生及び留学生への支援の充実」の 3 項目で自己評価を上回る S 評価とした。一方で、「学術交流及び学生交流による国際交流の推進」では、国際交流実績が飛躍的に向上したとはいえ、これは国際交流を支えるインフラ施設「さくら」整備の当然の結果であり、教員と学生の實力を適切に反映させるならば更に高みを目指せるはずだという意味を込めて自己評価より低い A 評価とした。また、「業務運営の改善」や「財務内容の改善」には、弛まぬ努力の跡が見受けられ有意に評価される。しかし、これらの事項は中長期的観点から忍耐強く推進していく必要があり自己評価と同じ B 評価とした。中期計画終了時までに累積される成果に期待したい。

組織、業務運営等に関する改善事項等について

組織、業務運営等に関し、特に改善を勧告すべき点はない。

公立大学法人広島市立大学の各事業年度における業務実績の評価方法及び基準について

1 法人による自己評価

- (1) 年度計画の記載事項ごとの実施状況を以下の5段階により自己評価し、評価理由と併せ、実績報告書に記載の上評価委員会に提出する。

評価の記号	実施状況の説明
s	質・量双方において年度計画を上回って実施されている。
a	質・量いずれか一方において年度計画を上回って実施されている。ただし、他方において年度計画を下回って実施されている場合を除く。
b	質・量双方において年度計画どおり実施されている。
c	質・量いずれか一方において年度計画を下回って実施されている。ただし、他方において年度計画を上回って実施されている場合は、双方の実施状況を総合的に勘案して「b」とすることができる。
d	質・量双方において年度計画を下回って実施されている。

- (2) 年度計画の小項目及び大項目ごとの自己評価についても(1)と同様とする。

2 評価委員会による評価

(1) 小項目評価

ア 「中期計画の達成に向けて、各事業年度の業務を順調に実施しているかどうか」という観点から、法人による自己評価を踏まえつつ、年度計画の内容の妥当性も含めて、小項目ごとに以下の5段階により評価する。

評価の記号	実施状況の説明
S	質・量双方において年度計画を上回って実施されている。
A	質・量いずれか一方において年度計画を上回って実施されている。ただし、他方において年度計画を下回って実施されている場合を除く。
B	質・量双方において年度計画どおり実施されている。
C	質・量いずれか一方において年度計画を下回って実施されている。ただし、他方において年度計画を上回って実施されている場合は、双方の実施状況を総合的に勘案して「B」とすることができる。
D	質・量双方において年度計画を下回って実施されている。

イ 評価委員会の評価が法人による自己評価と異なる場合は、その理由等を示すものとする。

(2) 大項目評価

小項目評価を踏まえ、大項目ごとに以下の5段階により評価するとともに、特筆すべき事項等があればその旨のコメントを記載する。なお、評価の記号ごとに以下の評点を付す。

評価の記号	実施状況の説明	評点
S	質・量双方において年度計画を上回って実施されている。	5
A	質・量いずれか一方において年度計画を上回って実施されている。ただし、他方において年度計画を下回って実施されている場合を除く。	4
B	質・量双方において年度計画どおり実施されている。	3
C	質・量いずれか一方において年度計画を下回って実施されている。ただし、他方において年度計画を上回って実施されている場合は、双方の実施状況を総合的に勘案して「B」とすることができる。	2
D	質・量双方において年度計画を下回って実施されている。	1

(3) 全体評価

大項目ごとに以下の評価比率を配分し、大項目評価の評点を加重平均（評点×評価比率を合計）した結果を基に評価する。また、法人による実績報告書の記述等を踏まえ、中期計画の実施状況に係るコメントを記載する。

大項目	評価比率
第2 教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためとるべき措置	
1 教育	20%
2 学生の確保と支援	10%
3 研究	15%
4 社会貢献	15%
5 国際交流	10%
第3 業務運営の改善及び効率化等に関する目標を達成するためとるべき措置	
1 業務運営の改善及び効率化等	15%
2 財務内容の改善	15%

評価の基準	評価の記号等	
4. $5 < X$	S	法人の業務は、中期計画の達成に向けて極めて順調に実施されている。
3. $5 < X \leq 4.5$	A	法人の業務は、中期計画の達成に向けて順調に実施されている。
2. $5 < X \leq 3.5$	B	法人の業務は、中期計画の達成に向けて概ね順調に実施されている。
1. $5 < X \leq 2.5$	C	法人の業務は、中期計画の達成に向けて十分に実施されていない。
$X \leq 1.5$	D	法人の業務には、中期計画を達成するために重大な改善事項がある。

※ Xは大項目評価の評点×評価比率の合計

全体評価（評点）

大項目名	評価の記号 (大項目評価)	※1 評点 (α)	評価比率 (β)	α × β	評価の記号 (全体評価)
第2 教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためとるべき措置					
1 教育	A	4	20%	0.8	
2 学生の確保と支援	A	4	10%	0.4	
3 研究	A	4	15%	0.6	
4 社会貢献	A	4	15%	0.6	
5 国際交流	S	5	10%	0.5	
第3 業務運営の改善及び効率化等に関する目標を達成するためとるべき措置					
1 業務運営の改善及び効率化等	B	3	15%	0.45	
2 財務内容の改善	B	3	15%	0.45	
計				※2 3.8	A

※1 「評点」は「評価の記号（大項目評価）」と連動する。S＝5点、A＝4点、B＝3点、C＝2点、D＝1点

※2 「全体評価の記号」はこの数値（α×βの計）と連動する。

全体評価の記号	S	A	B	C	D
α×βの計(＝X)	4.5<X	3.5<X≤4.5	2.5<X≤3.5	1.5<X≤2.5	X≤1.5

項目別評価（総括表）

評 価 項 目		評価の記号
第2 教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためとるべき措置		
1	教育	A
	(1) 教育内容の充実	
	ア 全学共通教育	S
	イ 学部専門教育	A
	ウ 大学院教育	B
	エ 特色ある教育	S
	(2) 教育方法等の改善	B
2	学生の確保と支援	A
	(1) 学生の確保	A
	(2) 学生への支援	A
3	研究	A
	(1) 研究活動の活性化	A
	(2) 研究成果の積極的な公開及び還元	B
4	社会貢献	A
	(1) 生涯学習ニーズ等への対応	A
	(2) 社会との連携の推進	A
5	国際交流	S
	(1) 国際交流の推進	A
	(2) 日本人学生及び留学生への支援の充実	S
第3 業務運営の改善及び効率化等に関する目標を達成するためとるべき措置		
1	業務運営の改善及び効率化	B
	(1) 機動的かつ効率的な運営体制の構築	B
	(2) 社会に開かれた大学づくりの推進	A
2	財務内容の改善	B
3	自己点検及び評価	B
4	その他業務運営	B

項目別評価

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
第 2 教育研究等の質 の向上に関する目標	第 2 教育研究等の質の向上に 関する目標を達成するためと るべき措置					
1 教育に関する目標	<u>1 教育（大項目）</u>		大項目評価 ○全学共通教育内容の充実 ・「3 学部合同基礎演習」（1 年次・必修）を新たに開講した。平成 30 年度の 3 学部入学生（428 人）を混合した 36 クラスに編成し、グループワーク等を通じて、学部の専門性を超えた多様な知識・価値観、コミュニケーション能力を養成した。 ・「いちだい知のトライアスロン」事業を活性化させるため、3 学部合同基礎演習にスタートアップコースを取り入れ、読書・映画鑑賞・美術鑑賞を通じて幅広い教養を身に付ける契機とした。そのほか映画上映会やビブリオバトルなど様々な取組を行い、その結果、講義レポート及び推薦コメントの投稿数は中期計画の数値目標に掲げた年間 2, 000 件を上回る 2, 624 件となった。 ・日本人学生と留学生とが語学力を高め合う「ランゲージチューター制度」を本格実施した。45 人（日本語 28 人、外国語 17 人）が活動し、活用時間が平成 29 年度に比べ 7 倍以上となるなど大きな成果を挙げた。 ○学部専門教育内容の充実 ・各学部の「人材育成の目標」と 3 ポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）を全面的に見直して公表するとともに、各学部において教育内容の充実を図った。国際学部では、専門性と学際性を両立させるための改革に取り組んだ。情報科学部では、「イノベーション人材育成プログラム」のカリキュラム策定、アクティブ・ラーニングの導入、プログラミングの教育内容の充実のほか、グローバル人材育成の充実を図った。芸術学部では、アートプロジェクト等による実践的教育等に引き続き取り組んだほか、プレゼンテーション能力・コミュニケーション能力を育成していくための検討を行った。 ・リメディアル教育については、「英語」及び「数学」に加え、新たに「素描・デッサン・塑造」を対象に実施して充実を図り、実施後のアンケートにおいてはいずれも高評価を得た。	a	〔評価理由〕 教育全般について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。	A

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
			○大学院教育内容の充実 ・平成 31 年 4 月の平和学研究科の開設に向け、設置手続のほか、教務、入試等の諸準備を行った。 ・国際学研究科では、3 ポリシーを全体的に見直して、新たなポリシーを策定し実践的な能力育成に係る内容を明記するとともに、開設科目を見直した。情報科学研究科では、学術交流協定校とのダブルディグリー制度や推薦入試制度、社会人を対象としたカリキュラム開発等に取り組んだ。芸術学研究科では、領域横断的な教育体制を整備したほか、芸術プロジェクトへの参加や展覧会などでの研究成果の発表を学生に促し、幅広い活動成果を挙げた。そのほか、情報科学研究科・芸術学研究科の双方の教員から指導を受けることができる「アドバイザー教員制度」を平成 31 年度から導入することを決定した。 ○国際社会及び地域の第一線等で活躍する人材の育成、平和関連教育など特色ある教育内容の充実 ・平成 30 年 4 月に開寮した国際学生寮「さくら」では、グローバル人材育成を目指し、寮生活そのものを教育と位置付けて運営するとともに、短期宿泊型の教育プログラムを実施した。 ・リーダー人材育成を志向する「広島市立大学塾」では、1 期生の後半の定期プログラム等を実施するとともに、1 期の点検・評価を行い、2 期の改善・充実に取り組んだ。 ・地域志向人材を育成する COC+教育プログラムでは、新たに「地域実践演習」を開講し、地域の魅力づくりや課題解決を内容とする演習を行った。 ・そのほか、他大学等と連携した医用情報分野の教育プログラムの実施、夏期集中講座「HIROSHIMA and PEACE」の改善・実施、平和関連教育の充実、各分野で活躍する者を講師とした講演会等の開催、市大生チャレンジ事業等による学生の成長につながる地域活動の推進などに取り組んだ。 ○教育方法等の改善 ・平成 30 年度からクォーター制を一部導入（41 科目）するとともに、クォーター制に係る研修会や学生アンケートの実施など、今後の改善等に向け取り組んだ。 ・そのほか、「成績評価に係るガイドライン」の策定、アクティブ・ラーニング推進に係る研修会の実施、「総合教育センター」（仮称）設置に向けた「広島市立大学クロスセクション委員会」の設置、			

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
(1) 教育内容の充実 各学部及び研究科における質の高い教育を行うとともに、幅広く深い教養と総合的な判断力を培い、豊かな人間性をかん養するため、各学部及び研究科の枠を越えた幅広い教育の充実を図る。加えて、地方創生に取り組む「地(知)の拠点大学」として、地域との連携・協働により、多様な環境下での実践的な教育を推進する。 また、「国際平和文化都市」を都市像とする本市の設立した公立大学法人が設置する大学として、平和に関する教育を積極的に推進するとともに、グローバル化への対応力を育成するための機会の充実を図る。	(1) 教育内容の充実 <u>ア 全学共通教育（小項目）</u> (ア) 多様な価値観に触れ、多様な視座・研究アプローチを学ぶため、国際学、情報科学及び芸術学という特色ある学部構成を生かし、必修科目として 3 学部合同ゼミを開設する。 (イ) 学生が、読書、映画鑑賞及び美術鑑賞を通じて専門分野を越えた幅広い教養を身に付けられるよう、「いちだい知のトライアスロン」事業のより一層の充実を図る。平成 33 年度までに、「いちだい知のトライアスロン」事業に係る感想レポート及び「おススメコメント（他の学生に本や作品を推薦するという視点で作成するコメントをいう。）」の提出件数を年間 2,000 件(平成 26 年度 1,012 件)にするとともに、附属図書館入館者数を年間 90,000 人（平成 26 年度 84,672 人）にする。 (ウ) 外国語による実用的・実践的なコミュニケーション能力を向上させるため、授業内容の改善等により、英	○3 学部合同基礎演習の実施 ○「いちだい知のトライアスロン」事業の活性化 ○英語及び第 2 外国語教育の充実に係る方策の実施、更なる見直し・	芸術資料館収蔵品のデータベース化など、さらなる教育の質の向上に向け、様々な取組を行った。 以上のように、優れた取組を実施したことから、「a」と評価した。			
			小項目評価 ○「3 学部合同基礎演習」の開講に当たっては、教職員が連携して諸準備を行った。 開講に当たり、担当教員に対して、説明資料を配布するとともに、学外活動での保険適用の要件や剽窃防止教育など、本演習において生じうる問題への対応について確認したほか、欠席学生の情報連絡体制を整備し、入学直後の学生の就学状況の把握と適切な支援に留意することとした。 このような準備の下、平成 30 年度入学生（428 人）を 36 クラス（1 クラス 11～12 人）に分け、1 年次に必修のゼミとして開講した。 いずれのクラスも 3 学部の学生で編成したほか、担当教員についても 3 学部で分担し、グループワーク等を通じて、学部の専門性を超えた多様な知識や価値観を育んだ。 さらに、「いちだい知のトライアスロン」事業を活性化させるべく、同事業を講義に取り入れ、読書、映画鑑賞、美術鑑賞を通して幅広い教養を身に付けるとともに、レポート作成やプレゼンテーション、ディスカッションによりコミュニケーション能力を養成した。取組に当たっては、単に講義レポートを投稿するだけでなく、発表を行うようにするなど、自身の取組を深く考察するものとなるように工夫した。 講義終了後は、学生アンケートを実施し、他学部の学生との演習については 64%、他学部教員による演習については 56%、「いちだい知のトライアスロン」の講義取り入れについては 45%の学生から「有益であった」との回答を得た。 講義実施後、担当教員等による 3 学部合同基礎演習ワーキンググループを開催し、次年度に向け、同演習に関し、学生及び教員の共通理解を図る資料を作成するとともに、教員説明会において、各学部代表による講義事例説明を取り入れた。 加えて、演習全体における成績評価基準の確立、「いちだい知のトライアスロン」投稿方法のウェブシステムの改善、再履修学生	a	【評価理由】 全学共通教育の充実について特に優れた取組を実施したと認められることから、「S」と評価した。 〔コメント〕 ○「3 学部合同基礎演習」が実施され、学生の評価も良い。今までの努力と緻密な準備の成果を評価したい。 ○「3 学部合同基礎演習」の開設にあたり教職員の連携による地道な準備のもと、専門以外の幅広い知識や価値観を学ぶ教育が行われている。特に「いちだい知のトライアスロン」では事業と講義を一体化させた新しい試みを取り入れられ、記憶教育から発表等を取り入れた「考える教育」への転換が行われている。全学で行われたこれらの共通教育は、学生から多くの賛同が得られた点を高く評価する。また語学教育においても、必要に応じて選択科目を変更する事ができる実情に合った教育体制を確立している。 ○「3 学部合同基礎演習」については、学部の枠を越え関心において多様な学生が討議を通	S

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
	語及び第 2 外国語教育の充 実を図る。	改善の検討 ○ランゲージチューター による外国語学習支援 プログラムの実施		への十分な支援体制の構築を行った。 以上のとおり、「3 学部合同基礎演習」の開講に当たり、「いちだ い知のトライアスロン」事業を講義に取り入れた結果、講義レポ ート及び推薦コメントの投稿数は中期計画の数値目標に掲げた 年間 2,000 件を上回る 2,624 件（平成 29 年度 1,619 件）となっ た。 【「いちだい知のトライアスロン」事業の取組実績】 ・3 学部合同基礎演習内での説明（427 人） ・新入生読書アンケートの実施（401 人） ・投稿方法を周知する動画及びリーフレットの作成 ・ウェブサイトでの投稿 Q&A の発信 ・知の鉄人表彰式及びコメント大賞表彰式の実施 ・講義レポート提出の出前講座の実施（13 人） ・ブックハンティングの開催（参加者 7 人、110 冊選書） ・出張講座の開催（2 回、92 人） ・「彫刻の輪郭」展における講座及び芸術鑑賞の開催（33 人） ・映画上映会の開催（2 回、172 人） ・英語多読マラソン開始説明会の開催（30 人） ・英語多読マラソンの開催（4 人 レポート投稿 52 件） ・ビブリオバトルの開催（約 50 人） ・「日本画制作の現場Ⅳ - 菅原健彦展 - 」における座談会の開 催（112 人） ・広島国際映画祭関連トークイベントの開催（約 40 人） ・ギャラリートークの開催（122 人） ・ライブラリーアシスタントによる「本の福袋」作成及び貸出 ・コメント大賞の選考 ・附属図書館入館者数 98,842 人（平成 29 年度:106,587 人） ・学生の図書貸出冊数 22,698 冊（平成 29 年度：25,976 冊） ○平成 30 年度入学生から、国際学部の「CALL 英語集中Ⅲ・Ⅳ」を 必修から選択に変更し、外国語科目選択を柔軟化した。英語によ るコミュニケーション能力の向上を図るため、芸術学部において は、平成 30 年度入学生から「英語応用演習Ⅰ・Ⅱ」を、情報科 学部においては、平成 30 年度入学生から「英語応用演習Ⅲ・Ⅳ」 を、それぞれ選択から必修に変更した。 また、外国語教育専門委員会において、第 2 外国語について、語 学力の高い入学生が初級授業を履修することなく中級授業から		じて学びあう場を設けること は社会体験としても意義深 い。 ○「剽窃防止」など、学術活動 を行うにあたっての倫理につ いて入学直後の学生に浸透さ せていることも評価したい。 ○「ランゲージチューター制度」 も、学生にはいっそう勉学に 励むモチベーションとなる う。 ○「3 学部合同基礎演習」を開講 し、これまでの「いちだい知 のトライアスロン」と連動さ せて効果を上げている点は高 く評価できる。 ○「ランゲージチューター制度」 の本格実施も興味深い。制度 の活用時間が大きく増加して いるので、今後の一層の展開 を期待したい。学生の評判な ど継続的なモニタリングも行 ってほしい。

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
学部専門教育では、各学部の理念と専門分野の特色に対応した効果的な専門教育を行う。	イ 学部専門教育（小項目） 学生の多様化に対応するとともに、社会で通用する実践的な能力を身に付けた学生を養成するため、学部専門教育の充実に取り組む。 (7) 国際学部においては、専門性と学際性を両立させるため、教育課程の充実及び専門領域認定（国際学部の五つのプログラム科目群のうち、一つの科目群から 36 単位以上を履修した場合、当該プログラム領域を専門に履修したことを認定する制度をいう。）の仕組みの見直しに取り組む。 (4) 情報科学部においては、	○専門性と学際性を両立させるための教育内容の充実、教育課程等の見直しに向けた検討	履修できるようにするため、配当年次の変更及び外部検定による初級授業の単位認定を検討した。その結果、平成 31 年度入学生から第 2 外国語中級授業の配当年次を変更することとした。 語学センターのランゲージラウンジを活用した授業外での外国語学習機会を提供するため、日本人学生が留学生に日本語を、留学生が日本人学生にその母国語を教える「ランゲージチューター制度」を本格実施した。 その結果、平成 30 年度は 45 人（日本語 28 人、外国語 17 人）が活動し、平成 29 年度に比べ 7 倍以上となる合計 516. 25 時間の制度活用（日本語：242 時間、フランス語：102. 75 時間、ドイツ語：62. 5 時間、中国語：61. 5 時間、韓国語：43. 75 時間、英語：3. 75 時間）があり、学生の留学前準備、留学生の日本語学習支援の充実に大きく寄与した。 以上のように、「全学共通教育内容の充実」について、優れた取組を行ったことから、「a」と評価した。			
			小項目評価 ○国際学部では、教育課程の充実策と領域認定の具体的な実施方針を議論する専門委員会として、国際学部将来構想委員会を立ち上げ、高大接続改革と連携させながら以下のとおり取り組んだ。 【取組内容】 ・人材育成の目標と 3 ポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）を全体的に見直し、公表した。 ・1 年次前期の必修専門基礎科目「国際研究入門」において、大学及び国際学部の 5 つのプログラムで学ぶ内容について、学期末に各学生が 4 年間の学修計画を立てる形に改善・充実化した。 ・国際学部の特色あるカリキュラムの一環として、日本語以外の外国語で実施する専門科目を 5 つのプログラム全てに配置し、実施した。 ・新領域認定制度の基本的な考え方、新たな 3 ポリシーに対応させた国際学部学士カイメージ図、国際学部カリキュラム全体像を国際学部将来構想委員会において作成するとともに、国際学部教務委員会との連携により、平成 31 年 4 月入学生より実施するための具体策を決定した。		a	【評価理由】 学部専門教育の充実について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。 〔コメント〕 ○国際学部将来構想委員会の設置を行い、人材育成の目標の見直しや 4 年間の学習計画の作成、卒業論文評価改革等、積極的な専門教育の改革に取り組んでいる。語学教育にも明確な目標を定め、英語によるコミュニケーション能力向上を目指す実質的な教育プログラムに取り組んでいる。また、本学の特長でもある芸術学部による地域実践型プロジェクト発展型 COC +アートプロジェクトも今後様々な領域での評価が期待できる。

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
	技術の進展に対応できる基礎教育の充実を図るとともに、グローバル人材の育成等を推進する。 (ウ) 芸術学部においては、創作工房及びスタジオを活用した実習科目の導入等により、学生の創作活動の幅を広げるための教育内容の充実を図る。 (エ) 大学教育の質を担保するため、英語、数学等のリメディアル教育（大学教育を受ける前提となる基礎的な知識等を補う教育をいう。）を実施する。	カリキュラムの策定、アクティブ・ラーニングの推進等に向けた検討 ○グローバル人材育成のための教育の実施と評価、更なる英語力向上に向けた検討 ○アートプロジェクト等による学外での実践的教育の実施、創作工房及びスタジオの活用、言葉による表現力の向上等に向けた教育改革の実施 ○リメディアル教育の実施		・領域認定と各演習における指導体制を結びつける仕組みとして、専門演習登録(2 年次後期)及び卒論演習登録時（3 年次後期）に、学生の研究テーマと履修プログラム科目の振り返りを行い、各演習担当者が確認するシステムを、平成 30 年度後期から導入した。 ・領域認定改革につながる教育の質保証の一環として、卒業論文評価制度改革を策定し、平成 31 年度卒業生より実施することとした。 ・クォーター制科目を新たに 9 科目導入した。 ○情報科学部では、人材育成の目標及び 3 ポリシーを全体的に見直すとともに、「イノベーション人材育成プログラム」のカリキュラムの策定、質問主導教育法などのアクティブ・ラーニング導入の検討、プログラミング、基礎実験などの教育内容の改善を行った。 「イノベーション人材育成プログラム」のカリキュラム策定に関しては、入試改革・教育改革検討ワーキンググループ、プログラミング教育検討委員会、入試委員会、教務委員会と連携し、カリキュラムの概要を提案するとともに、抽象化能力、思考能力、実装能力を高めるために導入される新たな科目（実社会指向基礎数学、批判的・創造的思考法など）の詳細なシラバス（案）を作成した。その他、能力別クラスの導入、早期卒業後の大学院進学、プログラムの評価方法について検討を進めた。 質問主導教育法などのアクティブ・ラーニングの導入に関しては、アクティブ・ラーニングの導入事例を文献で調査したほか、アクティブ・ラーニングを推進している高等学校との意見交換を行った。 プログラミングの教育内容の改善に関しては、プログラミングワーキンググループが基礎実験などの教育内容の改善について検討を進めた。また、情報処理学会で提案されている J 17 カリキュラムに関し、学部の専門教育科目で補充すべき科目の有無を調査したほか、入試改革・教育改革検討ワーキンググループにおいて、令和 2 年度のカリキュラム改革を目指し、教育改革基本方針案等を作成した。 さらに、情報科学部では、情報科学を駆使して活躍するグローバル人材の育成のため、次の取組を実施した。		○「全学共通基礎演習」の導入に伴い、学部教育も本格的に見直し、基礎学力の確保をめざして改善を図っている。 ○どの学部も教育改善と中期的な目標設定に堅実に取り組んでいる。 ○3 学部ともに教育内容の充実を着実に進めている。 ○ 芸術学部の COC+アートプロジェクトはアートによる地域貢献、あるいは芸術教育成果の社会への還元として注目している。

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等 記号
				【取組内容】 ・全ての学科において情報科学分野の英語力向上に資する内容の取り入れについて検討するとともに、平成 31 年度以降の「英語応用演習」の講義内容について、担当講師と協議を行い、情報科学分野のスピーキングとライティングの能力をより効果的に向上させるよう講義内容を見直すこととした。 ・学生の英語によるコミュニケーション力の向上のため、外部講師を招き、夏期英語集中講義を実施した（受講者：7 人）。 ・「英語応用演習Ⅲ、Ⅳ」を必修化することを決定し、卒業までに英語能力の到達目標を「CEFR」基準において、B1 レベルとすることを決定した。また、卒業までに英語能力の到達目標を実現するため、グローバル人材育成委員会において、各学年次における到達目標の設定と情報科学部の学生の英語教育のカリキュラムシーケンスの見直しを行った。 ○芸術学部では、アートプロジェクト等による学外での実践的教育の実施、創作工房及びスタジオの活用などに取り組んだ。 学外での実践的教育の実施については、地域展開型の芸術プロジェクトである COC+アートプロジェクトを 10 件実施し、多くの学生が地域における実践的な学びに参加した（参加学部生、大学院生 155 人）。 広島市と連携して進めている「基町プロジェクト」は、都市部における課題に触れながら、学び、実践する機会となっていることから、学生が積極的に参画するなど、活動の幅を広げている。 創作工房及びスタジオの活用については、木材加工室、金属加工室等を各専攻のカリキュラムの中で有効に活用した。 また、2 年目を迎えた、新たなものづくりができる人材の育成を目指す「マツダ・広島市立大学芸術学部共創ゼミ」においては、8 人の学生が参加した。平成 30 年度は、道具のデザインを意識させた教育プログラムとしたことから、具体的で機能美を高めた優秀な作品が目立った。 言葉による表現力の向上等に向けた教育改革に向け、演習、実習の中でプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力を育成していくための検討を行った。 ○リメディアル教育については、平成 29 年度の試行実施による見直しを踏まえ、下記のとおり「サポート教室」と称し、「英語」及び「数学」を継続実施するとともに、新たに「素描・デッサン・		

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等 記号
大学院教育では、国際学、情報科学、芸術学及び平和学の特色ある研究科及び研究所の構成を生かした個性的	<u>ウ 大学院教育（小項目）</u> 学生の多様化に対応するとともに、専門分野において優れた研究能力と実践的スキルを身に付けた学生を養成するため、大学院教育の		塑造」を対象に実施した。 【取組実績】 （英語） 内容：文法及び文法項目の TOEIC リーディング問題への応用 実施期間：平成 30 年 5 月 16 日～7 月 19 日（週 1 コマ×10 週） 対象学生：全学部対象（概ね TOEIC スコア 250 点以下の者） 受講人数：18 人（3 クラス） （数学） 内容：情報科学部 1 年前期で必修科目となっている「解析学Ⅰ」、 「線形代数学Ⅰ」の単位を修得するために必須である高等学校数学 実施期間：平成 30 年 4 月 10 日～7 月 13 日（週 2 コマ×13 週） 対象学生・受講人数：情報科学部入試（数学）得点下位 9 人＋ 2 年生以上で募集に応じた 1 人 （素描・デッサン・塑造） 内容：芸術学部における基本スキル向上を図るための実技指導 実施期間：【素描】平成 30 年 12 月 25 日～27 日（5 コマ×3 日間） 【デッサン】平成 30 年 10 月 2 日～平成 31 年 1 月 29 日（週 1 コマ×15 週） 【塑造】平成 31 年 2 月 13 日～15 日（5 コマ×3 日間） 対象学生・受講人数：前期の実習の成績を基に選出した 3 コース 15 人 最終日には、受講者に対する授業アンケートを行い、『「サポート教室」に対して「満足できるものであったか」との質問に対し、回答のあった全ての学生が、「強くそう思う」又は「そう思う」と回答するなど、高い評価を得た。 以上のように、「学部専門教育内容の充実」について、優れた取組を実施したことから、「a」と評価した。			
			<u>小項目評価</u> ○平和学研究科の開設に向けて、平成 30 年 4 月に文部科学省に対して、設置届出書類を提出した。5 月には、平和学研究科準備委員会を設置し、教務、入試等に関する必要な事項を審議した。 入学試験については、「A0 入試」、「一般・社会人特別入試」、「外国人留学生特別入試」の 3 区分で実施することを決定し、進学説		b	〔評価理由〕 大学院教育のための取組を計画どおり着実に実施したと認められることから、「B」と評価した。 〔コメント〕

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
な教育を実施し、高度な知識を身に付けさせるとともに、自己の能力を発揮して課題に対応でき、国際社会及び地域の発展に貢献できる研究者及び高度人材を養成する。	充実に取り組む。 (ア) 大学院に平和学研究科を新設する。 (イ) 国際学研究科においては、文系高度実務者養成のための教育を実施する。 (ウ) 情報科学研究科においては、社会のニーズを教育へ適切に反映するとともに、社会の変化に対応した人材育成のための教育内容の充実を図る。 (エ) 芸術学研究科においては、学生の創作活動の幅を広げるための領域横断的な教育に取り組むとともに、地域展開型の芸術プロジェクトへの参加等による実践的な教育を推進する。 (オ) 国際学、情報科学、芸術学及び平和学の特色ある研究科及び研究所の構成を生かした科目の新設等により、学際的な教育を推進する。	○文部科学省への設置届出、教員の新規採用、入学試験の実施等平和学研究科の設置に向けた諸準備 ○教育内容の魅力化に向けた検討 ○技術の進展に対応したカリキュラムの策定 ○領域横断的な教育の実施、COC+アートプロジェクトをはじめとした地域展開型の芸術プロジェクトへの参加促進 ○学際的教育推進に向けた検討	明会を開催するなど、大学院生の確保に尽力した。 その他、履修案内の作成や、規程等を整備したほか、大学院生及び新規採用教員の研究室の整備等を行った。 ○国際学研究科では、教育内容の魅力化に向け、現状を把握するため、国際学研究科に所属した全ての大学院生に関する情報を整理するとともに、大学院進学説明会・相談会において、参加者に期待やニーズについて聴取を行った。その現状を踏まえ、国際学研究科の3ポリシーを全体的に見直し、新たなポリシーを策定した。新たなポリシーには、従来の研究者・教育者養成のみならず、社会人や外国人留学生も視野に入れ、実務者としての実践的な能力育成に係る内容を明記した。また、国際学研究科における開設科目を全体的に見直した。 ○情報科学研究科では、ハノーバー専科大学（ドイツ）を訪問し、ダブルディグリープログラム制度の創設について意見交換を行った。 さらに、優秀な留学生を獲得するため令和元年 10 月から、海外学術交流協定大学推薦入試の新設を決定するとともに、英語の講義のみで学位取得が可能となるよう、全専攻において英語で講義を実施することとした。なお、英語で実施する科目数（単位数）は、医用情報科学専攻を除く各専攻 6 科目（12 単位）以上、医用情報科学専攻 4 科目（8 単位）以上と決めた。 enPiT-Pro 事業では、連携大学と協力しながら計 22 科目の e ラーニング用教材を開発し、本学は、スマートファクトリー及びインテリジェントカーについて学ぶカリキュラムの開発を担った。後期には、社会人を含む計 40 人の受講生に対してパイロット開講を実施した。 また、公益財団法人ひろしま産業振興機構と連携して、スマートファクトリー導入基礎講座を開発し、3 月に広島県や広島市経営者会が主催する講演会（参加者約 100 人）において講演を行った。大学院生確保に向けては、受講した社会人の単位認定などの仕組みについて継続的に連携大学と協議を続けた。 ○芸術学研究科では、平成 29 年度から、学生が専門領域外の教員から研究について指導を受けやすくするため、専門領域外の教員を副指導教員として申請できるよう制度を見直した。その結果、平成 30 年度において、6 人の学生が副指導教員を希望するなど、領域横断的な研究の推進に効果を上げた。			○平和学研究科は、国内において第一線の研究・教育スタッフの獲得を進めている。 ○大学院における教育も大幅な見直しを図っているが、成果が出るまで見守ることとする。 ○今後大きく注目される可能性のある平和学研究科の開設については、広島ならではのものであることから、世界中から大きな期待が寄せられる教育科目である。この他にも国際学研究科、情報科学研究科、芸術学研究科等、大学院教育内容の充実に対する取組は未来志向の教育内容であり、高く評価すべきである。 ○平和学研究科の開設に取り組んだ実績は評価できるが、入学者が少なかった点が残念である。特徴のある研究科なので、より広く周知をされたい。入学試験区分も柔軟な対応が求められる。 ○国際学研究科での実務者としての実践的な能力育成を目指した新たなポリシーの設定、情報科学研究科での英語での講義の実施による留学生の獲得を目指した取り組みなど新たな方策も打ち出しており、評価できる。

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
			また、地域展開型の芸術プロジェクトに、積極的に参加するように促すとともに、学生個々の研究成果を広く学内外で発表することを推奨し、幅広い活動成果を残した。 【取組実績】 ・芸術プロジェクト（10 人） ・グループ展（61 人） ・公募展（1 人） ・団体展（4 人） ・個展（8 人） ○学際的な教育を推進するため、博士前期課程における情報科学研究科と芸術学研究科の間で、他方の研究科教員から指導を受けることが出来る「アドバイザー教員」制度を平成 31 年度から導入することを決定した。 以上のように、「大学院教育内容の充実」について、計画に掲げる取組を着実に実施したことから、「b」と評価した。			
	エ 特色ある教育（小項目） (ア) 豊かな人間性と国際性を身に付けた人材を育成するため、国際学生寮を活用した教育プログラムの開発・実施に取り組む。 (イ) 社会に貢献するリーダー人材を育成するため、少数の学生を対象に課外教育プログラムを実施する「広島市立大学塾」（仮称）を創設する。 (ウ) 地方創生に取り組む「地（知）の拠点大学」として、地域に愛着・誇りを持ち、その発展に貢献する人材を育成するための教育カリキュラムの充実を図る。 (エ) 情報科学部及び情報科学研究科においては、他大	○国際学生寮を活用した教育プログラムの実施・評価 ○「広島市立大学塾」の実施・改善 ○COC+教育プログラム(3 年次対象) の実施 ○医用情報科学分野におけるカリキュラムの実	小項目評価 ○平成 30 年 4 月から国際学生寮「さくら」の供用を開始した。 日本人学生と外国人学生が共同生活を行うことそのものが、語学、異文化理解、対人関係の構築等を学べる教育プログラムであると位置づけ、学生役職者を中心とした寮生活の運営に取り組んだ。 毎月開催するレジデント会議には必ず教職員が参加するようにし、学生の自主性を尊重しつつ、助言や指導を行うよう、きめ細かな支援を行った。 また、平成 30 年 10 月に次年度の学生役職者を募集・選考し、新学生役職者 16 人を決定するとともに、新学生役職者に対して、研修プログラムを実施した。 【研修内容】 ・外部講師招聘によるリーダーシップ、コミュニケーション研修 ・日本赤十字社職員による AED 講習 ・関西大学視察による学生役職者交流研修 ・学生役職者交流研修報告会の開催 ・新年度寮運営の準備 さらに、短期滞在者ユニット等を活用して、全学生を対象に参加		a	【評価理由】 特色ある教育の充実について特に優れた取組を実施したと認められることから、「S」と評価した。 〔コメント〕 ○「さくらでミニ留学」を始めとして、多様なプログラムが設定され、学生による多くの主体的活動が惹起されている。この傾向は、広島市大のスクールカラーに発展・定着することになるかもしれない。 ○国際学生寮「さくら」での運営は教職員が見守る中、学生が主体となって運営しており、ただ単に海外の学生との交流の場としてだけでなく、お互いの自主性や尊厳を学び

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
	学、医療機関、企業等学外機関との連携を推進し、情報科学、医学及び工学の知識を有した優秀な人材の育成を図る。 (オ) 夏期集中講座「HIROSHIMA and PEACE」の講義内容等のより一層の充実を図る。 (カ) 平和科目の必修化等により、平和関連教育の充実を図る。 (キ) 学生が世界又は地域で活躍する人材と交流する機会の充実を図るため、外部講師を招いた講演会、特別講義等の開催に取り組む。 (ク) 学生の成長につながる地域での取組へ学生の参加を促す。	施、見直し・改善 ○夏期集中講座「HIROSHIMA and PEACE」の改善案の試行 ○平和関連教育の実施、大学院全研究科共通科目での平和関連教育の充実に向けた検討 ○外部講師を招いた講演会や特別講義等の開催 ○地域での取組への学生の参加促進		者を募り、英語を学ぶ短期宿泊型の教育プログラム「さくらでミニ留学」を実施し、9 人の学生が参加した。 【「さくらでミニ留学」の概要】 ・外国人講師を招き、ディスカッションやプレゼンテーション等の学修活動を中心にしながら、生活時間の全てにおいて英語のみで過ごす教育プログラム ○「広島市立大学塾」では、1 期生については、後半の定期プログラムを 4 月から計 15 回実施した。この他、ひろしん文化財団やアステールプラザの協力を得て「能楽」、「ひろしま神楽」を鑑賞した。夏期休業期間中には、「リーダーへのインタビュー」をテーマに、塾生がインタビューしたいリーダーを選び、企画書の作成やアポイントを取ってインタビューを行い、それをまとめるという自主プログラムを実施した。9 月末に卒塾式を行い、14 人を卒塾とした。 1 期終了後、点検・評価を行い、「広島市立大学塾（第 1 期）点検・評価報告書」を作成し、学内会議等で報告を行った。1 期生の感想に「市大塾で考えたことが実生活で生かされているなどと思う事が多く、挑戦する価値のあるプログラムだった」などの評価があった。1 期は試行的実施であったが、これまでの大学教育には見られない人材育成プログラムを目指して、引き続き PDCA サイクルによる充実を図ることとしている。 2 期生については、7 人でスタートした。2 期では、前半プログラムのテーマを多様な分野のリーダーシップに絞って実施したこと、沖縄研修を広島経済大学と合同で実施するなど、プログラムの改善に取り組んだ。 これらの取組を通して、1 期、2 期の塾生から、企業対象の説明会で大学の代表としてプレゼンテーションを行う者、新入生に対して、大学や留学の説明を行う者、「いちだい知のトライアスロン」事業において、最年少で「鉄人」認定される者が出るなど、様々な活躍をする者が出た。 ○COC+教育プログラムの実施については、地域貢献特定プログラムの「広島を問う」科目として、新たに「地域実践演習」を開講し、専門教育科目として各学部それまでの知見と専門性を生かしながら、地域の魅力を引き出し、高めていく取組や、地域の課題解決に向けた演習を進めた。 国際学部では、社会学の領域から瀬戸内海の離島のフィールドワ		合う教育の場になっている。 広島市立大学塾では、これまでにには見られない人材育成プログラムが行われており、平和学研究科の開設と共に特色のある教育内容である。 ○国際学生寮「さくら」を活用した教育（「ミニ留学」など）の着想を評価したい。 ○「広島市立大学塾」はきわめて意欲的な人材育成プログラムになっているように思われる。ただ少数の参加者に対して、関係教員の労力を含めて相当の資源が投入されているようであるから、費用対効果の冷静な検討も必要かもしれない。 ○夏期集中講座「HIROSHIMA and PEACE」について、過密スケジュールで講義が続くのは逆効果であろうから、今回の対応が適切であると評価する。 ○平和学研究科の開設を機に、平和関連の全研究科共通科目を開設したことは、研究科の認知度を高めるためにも好ましい。 ○国際学生寮「さくら」の活用が色々なところで活きている。「さくらでミニ留学」も面白いが、継続が重要なので、今後利便性などを改善しながら参加者を増やしてほしい。 ○「広島市立大学塾」での「リーダーへのインタビュー」や、

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
				ークを実施し、暮らしについて探究した。情報科学部では、広島市の土砂災害情報の発信方法や、広島地域の観光等の課題について理解を進めた。芸術学部では、学生がこれまで培ってきた専門的知識や技術等を活用し、作品制作を通して地域の魅力の創造や課題解決に取り組んだ。 地域志向マインドを醸成するための演習として位置づけた「地域課題演習」では、三原市、世羅町、周防大島町などを新たに加え、平成 29 年度に引き続き 10 のテーマを設定し、7 市町のテーマに 54 人が参加した。地域への関心度についてのアンケートで「非常に関心が高まった」、「関心が高まった」の割合が 90%になるなど、大きな成果を挙げた。 単位互換事業については、新たに広島大学から科目提供があり、科目数は全 18 科目となり、出願者数は県内 7 大学、10 人であった。 実施に当たっては、本学学生の受講を促進するため、単位互換科目の修得単位が卒業要件単位となるよう取扱いを見直した。 ○情報科学部及び情報科学研究科では、次のとおり、改善に向けた検討を進めた。 【取組内容】 ・平成 28 年度再編の医用情報科学科新カリキュラムに対応した教育を進め、前期に「医用統計解析」、「機械工学」を新設科目として開講した。 ・平成 29 年度に引き続き連携 3 大学と協力して臨床情報医工学プログラムを運営した。具体的には平成 29 年度以前に登録した受講生に対して、引続き本プログラムに対応した授業科目を開講するとともに、本学において臨床情報医工学プログラム特別演習発表会を開催した。 ・広島県の大学間連携教育プログラムに対する支援制度の終了に伴い、本学の社会連携センターと連携し、「ひろしま医工学スクール」を県内の教育・研究機関とともに医用情報科学科教員が主体となって開講した。 (受講者数：55 人（高校生 26 人、高等専門学校生 7 人、大学生 12 人、社会人 10 人) ・臨床情報医工学プログラムにおいて他大学から提供されてきた医学系講義に相当する講義として、「医科学概論」、及び「医用情報科学のための病院実習」の準備を進めた。「医科学概		地域貢献特定プログラムの「広島を問う」、平和関連科目の開設など地域密着型の特色ある取り組みを積極的に企画している。平和学研究科が開設したので、こうしたイベントを通じて特色のある広島が大好きな学生・社会人を育てて欲しい。

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
				論」に関しては、平成 31 年度前期に開講することとした。 ○夏期集中講座「HIROSHIMA and PEACE」について、平成 30 年度は、以下のとおり改善し、実施した。 【改善内容】 ・学生へのアンケートに基づき、講義の過密感を緩和する目的で、講義とグループワーク・体験学習のバランスを改善した。 ・海外の受講生の受け入れについて、本学事務局と平和首長会議事務局との役割分担を明確にした。 ・交流プログラムにホームステイ体験を取り入れ、参加者と受入家族の交流を促した。 ・海外の受講生受入先として、平成 30 年 4 月に開設した国際学生寮を提供し、寮生との交流を行った。 ・本学参加者を対象とした英語による事前研修を、国際学生寮において実施した。 以上の改善を実施し、12 か国 32 人が参加した。 参加者のうち平和首長会議の奨学金を受けた学生 9 人、また、本学の学術交流協定校からは、ハワイ大学マノア校（米）から 4 人、ハノーバー専科大学（ドイツ）から 1 人、ブラッドフォード大学（英）から 2 人の参加があった。 ○平成 31 年度の平和学研究科の開設を機に、全研究科共通科目として平和関連科目を開設することとした。 その結果、将来的なダブルディグリープログラム等による外国人学生の受け入れを念頭に、前期に「ヒロシマと核の時代」を英語で開講するとともに、後期に開講している「国際関係と平和」について、英語での開講も可能とした。 なお、広島平和文化センターが認定する「広島・長崎講座」に本学の学部総合共通科目（平和科目）の「国際化時代の平和」が平成 30 年度から新たに認定され、認定は全 10 科目となった。 ○学生が世界又は地域で活躍する人材と交流する機会の充実を図るため、様々な分野の講師を国内外から招へいし、内容の充実した講演会を多数開催した。 ○市大生チャレンジ事業を実施して、学生の地域での活動の支援を行った。本事業の経費補助などにより、平和記念式典に参加する来訪者のための臨時キャンプサイトの運営（ヒロシマピースキャンプ）、横川プロジェクト、写真作品とカメラのワークショップを通した基町アパートの地域活性化など 6 件の事業を実施した。		

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
(2) 教育方法等の改善 各学部及び研究科の教育目標を実現し、学生にとって魅力ある教育を提供するため、授業内容及び授業方法の改善を図るとともに、必要な教育環境を整備する。 また、学生が自主的かつ主体的に学習に取り組むことができるよう、学習環境を整備する。	(2) 教育方法等の改善（小項目） ア 教育効果の向上及び短期留学、インターンシップ、ボランティア活動等学外での学びの活性化のため、クォーター制の一部導入に取り組む。 イ 学生の学びを能動的かつ自律的なものにするための教育を推進する。 ウ GPA（Grade Point Average：履修科目ごとの成績に評点を付けて全科目の平均値を算出する成績評価システムをいう。）の分析・活用等により、教育内容及び教育方法の改善に取り組む。 エ 生涯学習、リメディアル教育等を効果的に実施する	○クォーター制の実施と導入効果の検証 ○アクティブ・ラーニングの推進 ○成績基準に係るガイドラインの策定、GPA の分析及び教育内容・教育方法の改善 ○設置検討特別委員会による組織体制・所管業	また、大学周辺にある特別養護老人ホームが主催する交流事業について、クラブ・サークル等に周知し、落語研究会、吹奏楽部など 4 クラブと調整を行い、交流事業への参加が実現したほか、きれいなひろしま・まちづくり市民会議が主催するゴミゼロクリーンウォーク事業について、クラブ・サークル等に対して参加を呼びかけ、426 人の学生が参加した。 各学部・研究科においては、横川シネマにおいて、2018 年ノーベル平和賞を受賞したデニ・ムクウェゲ氏の活動を追ったドキュメンタリー映画上映会の企画・開催や、地域住民からの期待が高かったにおいセンサを利用した土砂災害検知システムを構築し、センサデータを取得する取組を実施したほか、地域展開型の芸術プロジェクトなどを通じ、学生の地域での活動を促進した。 以上のように、「国際社会及び地域の第一線等で活躍する人材の育成、平和関連教育など特色ある教育内容の充実」について、「a」と評価した。			
			小項目評価 ○平成 30 年度からクォーター制を導入することを決定した学部 39 科目、研究科 2 科目のターム科目のうち、第 1 タームに 11 科目、第 2 タームに 9 科目、第 3 タームに 11 科目、第 4 タームに 10 科目を開講し、第 1 タームの 6 科目、第 3 タームの 7 科目について、それぞれ 8 週目に期末試験を行った。 なお、クォーター制導入に当たり、第 2 ターム及び第 4 ターム科目については、別途期間を設け GPA 制度に伴う履修取消しにも応じるようにした。 また、クォーター制導入に係る学内研修会を開催し、効果と課題を共有した。 【講師及び議題】 ・岡山大学 谷口秀夫教授 テーマ：「岡山大学の 4 学期制導入の経緯」 ・広島市立大学 弘中哲夫教授 テーマ：「広島市立大学の 4 学期制導入と課題」 参加者：29 人 また、上期及び下期に学生へのアンケート調査を実施し、次年度に導入効果の検証及び課題抽出を行うこととした。 ○アクティブ・ラーニングの推進に資するため、FD・SD 委員会及び		b	【評価理由】 教育方法等の改善のための取組を計画どおり着実に実施したと認められることから、「B」と評価した。 〔コメント〕 ○科目によって、クォーターに馴染む科目と、そうではない科目に分かれることから、効果と課題について慎重な検討を望みたい。 ○今後の成果に期待したい。 ○クォーター制の導入は、良い点もある一方、問題点もあると聞いているので、慎重に推進する方が良いと思う。 ○アクティブ・ラーニングによる双方向授業への取組をもう少し検討すべきではないか。 ○総合教育センター設置に向け

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
	ため、「総合教育センター」（仮称）の設置に向けて取り組む。 オ 芸術資料館所蔵品のデータベース化を推進するとともに、所蔵品の多様な活用を図る。	務等の検討 ○高精細記録の実施、所蔵品の多様な活用に向けた試行と展開		教務委員会が連携して研修会を開催した。 【研修実績】 ・講師：比治山大学短期大学部美術学科 齊藤克幸教授 ・テーマ：比治山大学・比治山大学短期大学部のアクティブ・ラーニングの取組と実践事例 ・参加者：63 人 また、本学での推進に向け、同大学のアクティブ・ラーニングの推進に係る資料を受領し、学内で情報共有を図った。 ○平成 29 年度の他大学の事例調査等をもとに、各学部・研究科との意見調整を行い、「成績評価に係るガイドライン」を策定し、平成 31 年度から適用することとした。 【主な項目】 ・成績評価（評価内容基準、割合） ・評価基準の明示 ・成績評価の説明（異議申し立ての受付） また、IR を担当する教員を平成 31 年度から採用することとし、GPA の分析・活用等による教育内容・教育方法の改善を進めていくこととした。 ○平成 30 年 6 月に「総合教育センター（仮称）設置検討特別委員会」を開催し、「総合教育センター」（仮称）設置に向けて組織体制・所管業務等について意見交換・検討を行った。 同委員会で検討を進めた結果、「総合教育センター」（仮称）については、段階的に整備を進めることとした。 段階的整備に当たっては、本学のリソースを活用した学内外における教育活動の充実・活性化を図ることを目的とし、教育活動間の連動性等を高めるための企画立案等を行うため、平成 31 年 1 月に「広島市立大学クロスセクション委員会」を設置し、2 月に第 1 回を開催し、意見交換を行った。 ○所蔵品や所蔵品の高精細画像を教育や企画展等で有効活用するため、所蔵品 112 点を、フォトスタジオにおいて 8,000 万画素のデジタル高精細解像度で撮影し、所蔵品のデータベース化及びデータベースの質的向上を推進するとともに、引き続き長期的にデータの蓄積を行い、本学の学生や教職員のみならず、学外の研究者、美術館学芸員などへの公開方法について検討を行った。 【取組実績】 ・金属工芸作品（刀装金具）（79 点）		て検討委員会を立ち上げ、その成果が大いに期待されている。 ○芸術資料館収蔵作品のデータベース化の推進と共に、そのデータの活用方法も検討すべき課題である。

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価		
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等	記号
2 学生の確保及び支援 に関する目標	2 学生の確保と支援（大項目）			・平成 29 年度卒業制作買上げ作品（33 点） 収蔵品の活用については、「新収蔵作品展」において、平成 29 年度購入作品を展示したほか、オープンキャンパスに合わせ開催した「卒業修了優秀作品展」において、これまでに買い上げた学生作品を展示した。 専門教育においては、デザイン工芸学科の授業において、収蔵作品（椅子等）の計測及び図面化など現物調査の学習に活用したほか、学芸員資格取得の必修科目である「博物館実習」においては、収蔵品の中から油絵、日本画、彫刻、デザイン工芸の 6 分野、現代表現等の全ての専攻・専門分野に関わる収蔵作品を活用して、博物館、美術館における作品の取り扱い、調書の取り方の実習に活用した。 以上のように、「教育方法等の改善」について、計画に掲げる取組を着実に実施したことから、「b」と評価した			
			大項目評価 ○意欲のある優秀な学生の確保 ・高大接続改革や令和 2 年度から始まる「大学入学共通テスト」に適切に対応するため、3 学部の 3 ポリシーを全面的に見直して公表した上で、入試制度を大幅に改革することとした。また、その公表に当たっては、入試区分ごとに「特に求める人物像」や「重点評価項目」を明示するなど分かりやすいものとした。 ・各研究科においても、大学院生の確保を目指し、入試制度や入試広報の見直しなどに取り組んだほか、平成 31 年 4 月設置の平和学研究科の入試に関しても、検討、広報活動を行い、入試を実施した。 ・「広島市立大学広報戦略」に基づき広報を行うとともに、QR コード等の活用により「大学案内 2019」（冊子）とウェブサイトとの連携の充実、イベントに合わせた電車・バス・地下街へのポスター掲示、各学部オリジナルサイトの充実などに取り組んだほか、新たに大学院進学情報サイトへの情報掲載を開始した。 ○学習環境の整備、キャリア形成に関する支援等による学生への支援 ・学生の自主的な活動を支援する取組として、ピア・サポーター運営体制の構築やボランティア活動の支援等に取り組んだ。ピア・サポーターについては、ミーティングや宿泊研修等を経て、12 月から試行的に活動を開始した。ボランティア活動については、新	a	〔評価理由〕 学生の確保と支援について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。	A	

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
			たに「社会貢献事業活動証明書」制度を創設するなどしたほか、7 月の豪雨の際には、大学が主催するボランティア活動を実施し、多くの学生・教職員が被災地支援活動に参加した。 ・学習環境の整備について、附属図書館では、開館時間を延長するとともに、国立国会図書館の「図書館向けデジタル化資料送信サービス」や「日経テレコン」を導入するなど図書館機能の充実を図った。語学センターでは、e ラーニングによる英語学習プログラムや英語多読マラソン等を実施し、また、情報処理センターでは、学外から安全に学内ネットワークへ接続可能な VPN 機能の強化など学習環境・支援体制の整備を進めた。 ・キャリア形成支援については、キャリアセンターを本部棟から学生に身近な講義棟へ移設するとともに、1 年次から系統的・発展的にキャリア形成について学修できるようキャリア教育関連科目の内容等を見直したほか、各学部専門科目にキャリア形成を支援する科目を設定した。インターンシップについては、参加を促進するよう学生に対する周知を強化するとともに、事前・事後研修等を行った。 ・平和学研究科に入学する社会人（国・自治体・報道機関など）を対象とした入学料・授業料免除制度を創設した。 ・そのほか、3 学部合同新入生オリエンテーションの実施案の検討（平成 31 年 4 月に実施）、保健管理センター（仮称）の設置に向けた検討などを行った。 以上のように、優れた取組を実施したことから、「a」と評価した。			
(1) 学生の確保 受験生の動向を踏まえた効果的な入試広報を展開するとともに、国内外からの意欲のある優秀な学生の確保に向けた取組を積極的に進める。	<u>(1) 学生の確保（小項目）</u> ア 教育内容の充実等により受験生への魅力を高め、アドミッション・ポリシー（入学者受入方針）に応じた入学者選抜を実施することにより、意欲のある優秀な学生を確保する。 イ 長期履修制度、海外学術交流協定大学推薦入試制度等を活用し、国内外から意欲のある優秀な大学院生の	○新入試の予告・公表、入試制度の改善と新入試の実施に向けた検討 ○意欲のある優秀な大学院生の受け入れに向けた改革の検討	小項目評価 ○令和 3 年度（令和 2 年度実施）からの「大学入学共通テスト」の実施など、高大接続改革に適切に対応し、教育の質を向上させるため、引き続き学長をトップとした「高大接続改革全体会議」を開催して検討を進め、3 学部の 3 ポリシーを全面的に見直すともに、公表した。 また、新入試の実施に向け、見直した 3 ポリシーに基づき検討を行い、令和 3 年度（令和 2 年度実施）入学者選抜に係る骨子を公表した。 【主な公表内容】 ・どのような学生を求めているかが明確になるよう、全学的な調整を行い、アドミッション・ポリシーに加え、入試区分ご	a	【評価理由】 学生の確保について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。 〔コメント〕 ○「高大接続改革」に合わせて、全般的な見直しがなされているが、「再掲」案件がほとんどであり、また制度的な見直し段階にある。今後の成果に期待したい。 ○大学院の入試を週末に実施す	A

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価		
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号	
	受け入れを行う。 ウ 学部の特色・魅力を受験生及び保護者に分かりやすく伝える広報、地域性を考慮した戦略的広報に取り組む。	○広報コンテンツの作成及び発信、広報戦略に基づいた広報の実施		とに「特に求める人物像」を定めた。 ・「関心・意欲」、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体性・協働性」について、どの部分を評価するかを整理し、「重点評価項目」を定めた。 ・「英語認定試験」の活用を決定するとともに、各学部において、活用方法を決定した。 このほか、新入試実施に向けた、問題例の作成やルーブリックの作成などを進めた。 ○各研究科において、次のとおり取り組んだ。 【取組実績】 ・国際学研究科では、大学院入試体制改革及び大学院広報体制の強化を重点取組課題の一つとして位置付け、全学調整及び関連事務局と連携しながら取り組んだ。まず、受験生への利便性を向上させるため、平日 2 日間にわたって実施していた試験を、土曜日の 1 日で行う体制に変更した。また、国際学研究科の 3 ポリシーを改定し、従来の研究者・教育者養成のみならず、社会人や外国人留学生も視野に入れ、実務者としての実践的な能力育成に係る内容を明記するとともに、大学院入試体制について、全面的に見直した。さらに、国際学研究科広報専用チラシの作成やオリジナルサイトを充実させるなど大学院における広報体制を強化するとともに、学部生や社会人等を対象とした進学説明会・相談会を実施した。 ・情報科学研究科では、学術交流協定大学からの推薦制度を生かして留学生を引き受けるため、西南大学電子情報工程学院（中）と教員交流を行った際、本研究科と各専攻の研究紹介を含む招待講演を行い、本研究科の教育環境と研究施設などをアピールした。また、本研究科の教員がハノーバー専科大学（ドイツ）を訪問し、ダブルディグリー制度の創設について意見交換を行い、創設に向けた検討を進めた。さらに、広く留学生を受け入れるため、英語で実施する科目数（単位数）は、医用情報科学専攻を除く各専攻 6 科目（12 単位）以上、医用情報科学専攻 4 科目（8 単位）以上とし、英語のみの授業で修士号を取得できるようにした。また、高等専門学校を訪問し、高等専門学校の専攻科の教員に本研究科を受験するように依頼した。 ・芸術学研究科では、学部生に対し、大学院への進学説明を行		る取り組み（国際学研究科）については高く評価する。 ○研究科、学部の広報については、ウェブサイト掲載情報のいっそうの充実を期待したい。 ○3 学部の 3 ポリシーを全面的に見直すなど改革に取り組んでいる。 ○学部生の確保は良いが、大学院は芸術学研究科を除いてどこもかなり定員を下回っている。博士後期課程も充足率がかなり低いので、対策が必要である。 ○全学部で総合型選抜をとり、重点評価項目を設け優秀な学生の確保を目指しておりその為には、まず教育に対して熱意のある教員の存在が不可欠である。 ○ウェブサイトやポスター、進学情報サイト等を活用した積極的な広報活動に加え、教育内容を周知するため、受験生説明会並びにワークショップを研究室毎に行う必要がある。	

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
				う機会を設けるとともに、博士前期課程の成果発表会への参加、見学を積極的に行うよう指導した。また、学外からの研究生希望者に対しても、大学院入学につながる人材の確保に努めた。さらに、オリジナルサイトの充実に向け、検討を進めた。 - 平成 31 年 4 月に開設する平和学研究科では、パンフレット（日・英）を作成し、各大学、メディア各社等へ情報提供するとともに、平和学研究科のウェブサイト（日・英）を作成した。また、広島平和研究所主催の「ヒロシマ平和セミナー 2018」の終了後に進学説明会を開催し、全体説明会及び教科を担当する教員による個別相談を実施した。さらに、平和学研究科開設記念講演会及び進学説明会(2 回)を開催するなど、広報活動に注力した。 ○学部の特徴・魅力を受験生及び保護者に分かりやすく伝える広報等を推進するため、次のとおり取り組んだ。 【取組実績】 「広島市立大学広報戦略」に基づく広報活動を行うとともに、アンケート調査等を実施し、広報活動の効果の確認等を行った。「大学案内 2019」の作成に当たっては、芸術学部を有する大学としての特色を持たせるとともに、QR コード等の活用によりウェブサイトとの連携を充実させた。また、広島交通株式会社が運行するバス車内や、オープンキャンパス等各種イベントに合わせ、紙屋町シャレオにポスター掲示を行った。さらに、大学院広報体制を強化するため、大学院進学情報サイトへの情報掲載を開始した。 - 国際学部では、学部オリジナルサイトを積極的に活用するため、①国際学部の特徴をわかりやすく伝える動画コンテンツの作成、②国際学研究科ページを増設し、研究科担当教員情報や研究内容を発信するとともに、外国人留学生を対象とした奨学金情報などへのアクセス利便性の向上、③国際学部で実施する専門科目について、英語版シラバスの作成など、機能の充実を図った。また、大学院広報を目的としたチラシを作成し、専門演習を通じて学部学生に配布するとともに、学内外で実施した進学説明会・相談会において活用した。 - 情報科学部では、学部オリジナルサイトの更新を完成させるとともに、大学院進学を促すパンフレットを作成した。		

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
(2) 学生への支援 全ての学生が心身ともに健康で充実した大学生活を送ることができるよう、学習環境、生活環境、健康管理、課外活動等様々な面で支援の充実を図る。 また、学生自らが、社会の中で自分の役割を果たしながら自分らしい生き方を実現するための力を身に付けるよう、また、やりがいを持って働く生き方について考え、行動できるよう、入学時からキャリア形成に関する支援の充実を図るとともに、地元企業との連携強化等により、就職支援の充実を図る。	(2) 学生への支援（小項目） ア 新入生の大学への適応が円滑に進むよう、オリエンテーション等の充実を図る。 イ 教職員によるきめ細かい支援・相談等の実施、学生同士の助言等が行える環境づくりに取り組む。 ウ 各附属施設等の設備、サービス内容の充実、各施設間の連携等により、学習環境及び学習支援体制の整備に取り組む。 エ 学生の心身の健康の保持増進を図るため、「保健管理センター」（仮称）の設置に向けて取り組む。 オ 卒業生及び地元企業との連携によるセミナーの実施、インターンシップの活用等により、入学時から就職・キャリア形成に向けた支援を充実する。平成 33 年度までに、インターンシップ参加学生数を年間 63 人（平成 27 年度 42 人）にする。	○3 学部合同新入生オリエンテーションの実施案の策定 ○ピア・サポート運営体制の構築、ボランティアの養成 ○外国語学習機会の充実をはじめとした各附属施設等における学習環境及び学習支援体制の整備 ○保健管理センター（仮称）の在り方の検討 ○キャリア教育関連科目の設計、キャリア形成に係る情報管理・発信の充実、キャリアセンターの機能の充実 ○インターンシップの推進及びキャリア形成の視点に立ったインターンシップ等の支援の実施、見直し・改善	・芸術学部では、学部の教育内容を示したカリキュラムガイド集の増刷と進路説明会での配布を行うとともに、カリキュラムガイド集が、より魅力的で効果的な学生募集の情報提供となるよう見直し、改訂版の作成方針について検討した。また、ウェブサイトの制作についても、検討を進めた。 以上のように、「意欲ある優秀な学生の確保」について、優れた取組を実施したことから、「a」と評価した。			
			小項目評価 ○新入学生を対象としたオリエンテーションの実施案の策定に当たっては、学生委員会において検討するとともに、学生や教職員からも広くアイデアを募集し、平成 31 年 4 月に実施することを決定した。 【実施内容】 ・学生生活体験発表 ・オリエンテーリング ・交流昼食会 ・レクリエーション また、平成 31 年 4 月の実施に向けた諸準備（講師の手配、物品の準備等）を進めた。 ○ピア・サポート運営体制の構築、ボランティアの養成について、以下のとおり取り組んだ。 【取組内容】 ・ピア・サポート活動の運営については、ピア・サポーター（学生）の主体性を大切にしつつ、保健管理室の教員及び学生支援室職員が指導・支援に当たる体制とした。 ・ピア・サポーターへは、5 人の学生から応募があり、活動するための心構え等を学ぶ機会として、ランチミーティングを開催した。 ・ピア・サポーターとしてのスキル修得や、ピア・サポーターの相互交流や活動の企画等を目的に、宿泊研修を実施した。 ・12 月から、試行実施として図書館に掲示板及び投書箱を設置し、掲示板による相談活動を開始した。 ・平成 31 年度 of 取組の一つとして、掲示板により、新入生向けの履修アドバイスをを行うことを決定した。 ・学生のボランティア参加促進のため、学内外でボランティア	a	〔評価理由〕 学生への支援について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。 〔コメント〕 ○特に目立った活動はないが、堅実に行っている。 ○制度としては、多様化してきた。この点は評価するが、まだ設定段階の案件が多い。成果が出てから評価したい。 ○学習環境の整備も進み、学生のボランティア活動も自主的に行う土壌が出来てきている点は高く評価できる。また学生の目線に立った学習環境の整備として図書館の利用時間の延長や遠隔接続システムの充実も図られてきている。 ○今後益々比重が大きくなっていくキャリア教育にも力を入れ、キャリアセンターを立ち上げ充実した環境作りを行なっている。 ○附属図書館における取り組み（学生アルバイトを活用した開館時間の延長）は評価した	A

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
	カ 学生のクラブ、サークル活動、ボランティア活動等を奨励するとともに、それらを支援するための設備及び制度の充実等を図る。 キ RA (Research Assistant : 大学院生が研究の補助を行う制度をいう。) の導入等により、大学院生の経済的支援の充実を図る。	○ボランティア活動への参加促進等課外活動の奨励・支援 ○大学院生の経済的支援策の検討		活動に参加した学生に対し、社会貢献活動従事証明書を交付する制度を創設した。 そのほか、日本人学生と留学生が、それぞれ日本語、留学生の母国語を互いに教え合うランゲージチューター制度を本格実施した。 ○各附属施設等において、以下のとおり取り組んだ。 【取組実績】 ・附属図書館では、学生アルバイトを活用し、これまで試行実施していた開館時間の延長を決定するとともに、学生アルバイトの確保に努め、運営体制を整えた。また、絶版等により入手困難な資料を国立国会図書館から電子媒体で受信できる「図書館向けデジタル化資料送信サービス」の運用を開始した。さらに、教育機関向けサービスのデータベース「日経テレコン」を導入し、これまでの司書代行検索に加え、学生が自由に検索できる環境を整えるなど、図書館機能を充実させた。 ・語学センターでは、夏期休暇中に外国語学習機会を提供するため、e ラーニングによる英語学習プログラムや英語多読マラソンなどを実施し、計 62 人が受講した。 ・情報処理センターでは、提供するサービスを改善し、学習環境及び学習支援体制の整備を進めた。学外から安全に学内ネットワークへ接続可能な VPN 機能を強化した。また、情報処理センター機器のリプレースにおいて、関係部局との調整・検討、機能及び費用対効果を考慮した仕様の策定などについて、予定通り実施した。 ○「保健管理センター」（仮称）の設置に向けて、以下のとおり取り組んだ。 【取組内容】 ・県内他大学の保健管理センターの体制及び機能等について調査を実施し、取りまとめた。 ・保健管理室長を中心に関係教職員で「保健管理センター」（仮称）の在り方等について検討を進めた。 ・学生支援室との業務・役割分担や学内組織としての位置づけ等の課題を整理した。 ・今後は、別に設置を検討している「総合教育センター」（仮称）との関係性を踏まえて準備等を進めることとした。		い。

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
			○キャリア形成支援の充実に向けて次のとおり取り組んだ。 【取組実績】 ・キャリア教育関連科目の設計については、現行のカリキュラムを生かしつつキャリア形成支援を充実させることを基本的な考え方として、次の 3 項目に取り組んだ。 ①キャリア形成について意識する機会の設定 「キャリアデザインシート」を「学生 HANDBOOK」に掲載し、各学部で目標設定や振り返りの時間を設けることとした。 ②授業科目「キャリアデザイン」、「キャリアサポートベーシック」の見直し 学生が初年次から系統的・発展的にキャリア形成について学修できるよう、内容、履修時期等を見直し、平成 31 年度入学生から適用することとした。 ③各学部の専門科目におけるキャリア形成支援 カリキュラム・ポリシーに即したキャリア形成を支援する科目を各学部で決定するとともに、該当科目のシラバスに、キャリア形成支援について明記することとした。 ・正課の授業科目だけでなく、正課外のガイダンスやセミナーを含めたキャリア教育の全体像を「キャリアデベロップメントプログラム」として整理した。 ・キャリアセンター機能の充実について、キャリアセンターの移設に必要な諸準備を着実に行之、予定通り 10 月に本部棟から学生に身近な講義棟への移設を完了した。移設後のキャリアセンターには、キャリアアドバイザーによる個別相談や模擬面接ができる専用の相談室を設置したほか、学生が企業研究や書類作成等ができるよう、机、タブレット端末、プリンタを配置するなど、設備を充実した。 ・キャリア形成に係る情報管理・発信の充実については、キャリアセンターの移設に合わせて、情報科学部・研究科の就職・キャリア関連業務を統合し、情報管理の一元化を実現した。 また、キャリアセンターオリジナルサイトの活用や、学内のデジタルサイネージを活用し、情報発信の充実に務めた。 ○インターンシップの推進に向け、次のとおり取り組んだ。 【取組実績】 ・低学年から参加可能な企業インターンシップについて、学生			

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
				への周知を強化し、1・2 年の学生計 6 人の参加があった（平成 29 年度は 2 人）。 ・インターンシップ応募前の説明会及び事前研修を実施した。事前研修では、従来のマナー研修に加え、インターンシップ事前事後自己点検評価シートの活用について指導を行った。 ・地元企業に対する理解を深めることを目的に、一般社団法人中国経済連合会が主催する教職員向け「企業訪問半日コース」に 16 人の教職員が参加した。 ・先輩学生がインターンシップ参加後に回答したアンケートをキャリアセンター内で自由に閲覧できるようにした。 ○ボランティア活動への参加促進等課外活動を奨励・支援するため、以下のとおり取り組んだ。 【取組実績】 ・今後の取組方針を決めるため、クラブ・サークルを対象にボランティア活動状況調査を実施（32 団体回答）し、その結果を取りまとめた。 ・大学対抗スポーツ大会については、学生のニーズが少なく実現の可能性が低いため、当面開催を見送ることとした。 ・学生同士がスポーツ活動を応援する機運の醸成を目指すため、本学学生団体が大会に出場する場合には関係情報を広報することを決定し、軟式野球部の全国大会出場及び壮行会の開催について全学生に周知した。 ・平成 30 年 7 月豪雨の際には、大学が主催するボランティア活動を実施し、延べ 199 人の教職員・学生が参加した。また、個人による災害復旧のボランティアへの参加促進を図るため、社会福祉法人全国社会福祉協議会のボランティア活動保険に加入した学生に対して、保険料を助成する方針を決定し、全学生に周知した。 ・学生のボランティア参加促進のため、学内外でボランティア活動に参加した学生に対し、社会貢献活動従事証明書を交付する制度を創設した。 ・社会福祉法人広島市安佐南区社会福祉協議会の職員を招聘し、ボランティア参加のきっかけづくりを目的とするイベント「ランチタイム・ボランティアの扉」を実施した。 ・本学が主催又は取りまとめるボランティア事業に参加したクラブ・サークルに対して、ボランティア奨励費を支給した。		

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
3 研究に関する目標 教員それぞれの独創性ある研究を推進するとともに、国際学、情報科学、芸術学及び平和学の特色ある学部、研究科及び研究所の構成を生かした横断的な研究、広島平和研究所を軸とした世界的な視点に立った平和研究、地域課題の解決に向けた研究をはじめ、個性的な研究活動及び学内外との研究交流を積極的に展開する。その研究成果を教育に反映させるとともに、社会に還元する。 また、外部資金の積極的な獲得と活用により、研究の活性化を図る。	3 研究（大項目）		○大学院生の経済的支援策については、平成 31 年 4 月に開設する平和学研究科において、国・地方公共団体・報道機関・国際機関等で働いている社会人を対象とした入学料・授業料の減免制度を創設した。 以上のように、「学習環境等の整備、キャリア形成に関する支援等による学生への支援」について、優れた取組を実施したことから、「a」と評価した。			
			大項目評価 ○特色ある学部等の構成を生かした研究活動、外部資金の積極的な獲得等による研究活動の活性化 ・「草の根災害情報伝搬システムの研究開発」や「基町プロジェクト」のほか、AI を活用した家畜疾病の早期発見技術を開発する「人工知能未来農業創造プロジェクト推進事業」（農水省）や新学術領域研究（科研費）など、特色ある研究活動に取り組んだ。「草の根災害情報伝搬システムの研究開発」（本学 3 研究室と KDDI 総合研究所が連携）では、公民館でのデモの実施や、高校生がフィールド実験に参加する高大連携事業にも取り組み、テレビ・新聞などで報道されるなど注目を集めている。「基町プロジェクト」では、COC+アートプロジェクトと連携し、空き店舗を活用し更なる展開を図った。また、広島平和研究所では、研究フォーラム（6 回）の開催のほか、プロジェクト研究（3 テーマ）などに取り組んだほか、1 月には、学術協力・研究協力の発展を目的として、新たに国立ソウル大学校統一平和研究院と覚書を締結した。 ・外部資金の獲得について、外部資金獲得総額は平成 29 年度を下回ったものの、科研費については平成 29 年度を上回るなどの成果を挙げた。また、さらに科研費獲得実績を向上させるため、平成 30 年度から、学内の競争的研究費である「特定研究費」を「特色研究費」、「準備研究費」及び「科研費獲得支援研究費」に再区分する制度改正を行うとともに、「科研費獲得研修会」を行った。 ○研究成果の積極的な公開及び還元 ・研究成果の公開や社会への還元について、各学部・研究科では、叢書・紀要等の発行、講演会・公開講座・セミナー・展覧会等の開催、論文発表、学会発表などに積極的に取り組んだ。広島平和研究所では、連続市民講座、国際シンポジウム、研究フォーラム（6 回）のほか、開所 20 周年事業として「ヒロシマ平和セミナー		a	〔評価理由〕 研究全般について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
			2018」を開催するとともに、紀要・ニューズレター・ブックレットのほか、「アジアの平和と核－国際関係の中の核開発とガバナンス」を刊行した。 以上のように、優れた取組を実施したことから、「a」と評価した。			
	(1) <u>研究活動の活性化（小項目）</u> ア 国際学、情報科学、芸術学及び平和学の特色ある学部、研究科及び研究所の構成を生かした本学特有の新しい分野の研究活動並びに国際貢献及び地域貢献の視点で社会との関わりを意識した研究活動のより一層の活性化を図る。 イ 研究活動を活性化するため、URA（University Research Administrator：研究者とともに研究活動の企画・マネジメント等を行うことにより、研究活動の活性化、研究開発マネジメントの強化等を支える人材をいう。）を導入するとともに、科学研究費をはじめとする外部資金の積極的な獲得に取り組む。平成 33 年度までに、外部資金を獲得している教員の割合を年間 63.8％（平成 27 年度 53.8％）にする。 ウ 芸術研究の発表活動を促進するため、学内外の作品展示スペースの充実・活用	○本学の特色を生かした新しい分野の研究活動や社会との関わりを意識した研究活動の活性化 ○外部資金の積極的な獲得による研究活動の活性化 ○既存の作品展示スペースの活用促進、作品展示スペースの新たな確	小項目評価 ○本学の特色を生かした分野の研究活動や社会との関わりを意識した研究活動の活性化のため、次のとおり取り組んだ。 【取組実績】 ・教員の科研費獲得実績を向上させるため、平成 30 年度から特定研究費を特色研究費準備研究費・科研費獲得支援研究費に再区分する制度改正を行った。 ・国際学研究科では、地元の要請に基づき、広島県水産海洋技術センターと連携し、広島湾のかき筏に住みつくクロダイのブランディング化に関する研究を開始し、水中撮影及び分析の調査に当たっては、情報科学研究科の教員と共同で実施した。 ・情報科学研究科では、情報科学における新分野（モニタリングネットワーク、社会情報学）を進展させるため、教員の選考・採用を行った。また、科研費新学術領域研究において、「分子シミュレーションによる生体活性サイトの構造・機能関連の解明とデザイン」の研究や、農業・食品産業技術総合研究機構の研究開発費で、AI を活用した家畜疾病の早期発見技術の開発などを行う「革新的技術開発・緊急展開事業のうち人工知能未来農業創造プロジェクト推進事業」の研究、科研費 A（基盤研究（A））で通常の内視鏡を利用しながら、胃や腸などの広い範囲について、対象やその周辺の形状及びサイズの計測が行える「パターン投影と深層学習を利用した頑健で高精度な 3 次元内視鏡システム」の研究を、それぞれ進めた。また、外部資金を活用した研究活動の活性化の事例として、総務省戦略的情報通信研究開発推進事業の受託研究費を活用して、情報工学専攻ネットワークコースの 3 研究室（ネットワークソフトウェア研究室、情報ネットワーク研究室、モニタリングネットワーク研究室）と KDDI 総合研究所が連携して豪雨災害の被害を低減することを目的とした「草の根災害情報伝搬システムの研究開発」を進めた。本研究開発の	a	〔評価理由〕 研究活動の活性化について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。 〔コメント〕 ○科研費獲得支援研究費の実施など、創意工夫が見られる。 ○平和研究所による国外の機関との協力協定締結は平和研究を一段と活性化づけるものと期待する。 ○科研費の採択率が高い。大型の競争的研究費も獲得して評価できる。 ○クロダイのブランディング化、「『戦後』の史的再考」プロジェクトなど特色のある研究も是非継続的に発展させて欲しい。 ○地域に根ざした研究活動が多数展開されるようになった。これも広島市大のカラーになってきた。科研費等の成果も頑張っている。 ○地域と密着した基町プロジェクト等を活かした芸術学部との連携の強化や、草の根災害情報伝搬システム等の特色ある研究開発がメディアからの評価を受けている。今後これらがマネジメントにつなげる	A

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
	に取り組む。 エ 広島平和研究所における研究活動を活性化するため、学外研究者の積極的な参画等を促進する。また、広島に立地する研究所として、核・軍縮等特定のテーマを定めたプロジェクト研究を実施する。	保・充実に向けた検討 ○学外研究者の参画促進及びプロジェクト研究の実施		成果は、安佐北区三入公民館でデモを実施し、テレビ、新聞のメディアで報道されるなど注目を集めた。 ・芸術学研究科では、「基町プロジェクト」において、平成 29 年度の実績をもとに、地域から学ぶ、考える、表現するといったプロセスの教育研究を推進し、COC+のアートプロジェクトと連携し、空き店舗を活用しながら更なる展開につなげた。また、他大学の学生 40 人余りを迎え基町アパートの見学会を支援するなど、外部との交流を図った。 ○外部資金の積極的な獲得に取り組み、獲得した外部資金を活用して活発な研究活動を実施した。 【科研費等外部資金獲得実績：（ ）は平成 29 年度実績】 ・科研費 申請率 64. 8%(72. 9%)、採択率 52. 8%(53. 2%)、獲得金額〔間接経費含む。〕124, 930 千円（121, 992 千円） ・受託研究、共同研究、補助金、奨学寄附金 72 件、158, 744 千円（75 件、166, 383 千円） ・外部資金合計 283, 674 千円（288, 375 千円） ・外部資金獲得教員率 45. 9%(49. 5%) ※申請率、採択率、外部資金獲得教員率は専任の教員のみで計算 ○芸術学部及び芸術学研究科では、研究活動の活性化の為、芸術資料館をはじめとする既存の作品展示スペースの活用促進及び作品展示スペースの新たな確保・充実に取り組んだ。 【取組実績】 ・収蔵作品及び施設を積極的に活用するため、老朽化した芸術資料館展示室の天井ライトレールダクトの改修を実施するとともに、従来のハロゲンライトから、省エネや熱の発生の少ない LED ライトへと変更した。 ・芸術資料館において、「卒業修了作品展」、「平成から未来へ野田弘志 リアリズムの軌跡展」などの展覧会を多数開催した。（開催日数：120 日、来場者数 5, 093 人（卒業修了作品展を除く）） ・広島市が管理する史跡・広島城跡二の丸施設活用のため、芸術資料館収蔵作品（陶器作品）を貸し出すとともに、平和大通りの賑わいづくりのためのイベント「平和大通り芸術展」に卒業修了制作買上げ作品 3 点を貸し出した。		ことの検討が必要である。 ○科研費獲得支援研究費の新設等に加えそれに関する人材の確保も検討の必要がある。 ○外部資金への積極的なアプローチも行われているが、その為には魅力的な大学構築が必要になってくる。

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
				・芸術系 8 大学の視察訪問及び 2 年間にわたり試験的に実施した学生企画展の検証を踏まえ、学生が自由に研究発表できる新たなギャラリー設置の具体化に向け、検討中である。 ○広島平和研究所では、研究会や研究フォーラムの開催を通じ、国内外から多数の学外研究者等を招聘して研究活動の活性化を図るとともに、研究所としてのプロジェクト研究を実施した（学外研究者の参画は 15 人）。 【取組実績】 ・研究フォーラム（6 回） 講師：石岡丈昇氏（北海道大学大学院教育学研究院准教授） テーマ：「貧困から平和を考える－平和概念の再構築へ」ほか ・コンラート・アデナウアー財団との共同ワークショップ“The New Inter-national Relations Template and Japan’s Indo-Pacific Vision”（新しい国際関係の枠組みと日本のインド太平洋構想）を、1 月 24 日、25 日の 2 日間開催し、国内外から研究者が参加した。 なお、平成 30 年度に実施したプロジェクト研究は、以下のとおりである。 【平成 30 年度実施プロジェクト】 ・「戦後」の史的再考－戦争から平和への移行期研究 ※継続 2 年目 ・The Role of Reconciliation and Justice in the Peace Process（平和構築プロセスにおける和解と正義の役割）※継続 2 年目 ・Research in Several Archives of American hibakusha and Atomic Veterans Conference（米国のヒバクシャ資料館、及び、核に関与した退役軍人会議に関する研究） 「『戦後』の史的再考」プロジェクトでは、参加者が研究成果を広島平和研究所主催の「連続市民講座」で講演することにより、市民への還元を図るとともに、論文化して市民向けのブックレット（「ヒロシマ平和研究所ブックレット」第 6 号）誌上に発表した。 また、1 月には韓国の国立ソウル大学校統一平和研究院と、学術協力及び研究協力を促進し、発展させることを目的として覚書を締結した。これに基づき、2019 年 6 月に、国立ソウル大学校において各国の平和研究者が集い、シンポジウムを開催することが決		

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
			定した。 以上のように、「特色ある学部等の構成を生かした研究活動、外部資金の積極的な獲得等による研究活動の活性化」について、優れた取組を実施したことから、「a」と評価した。			
	<u>(2) 研究成果の積極的な公開及び還元（小項目）</u> 論文発表及び出版による研究業績の向上に努める。加えて、叢書の出版、シンポジウム、研究公開イベント、展覧会の開催等により、研究成果を積極的に社会に公開及び還元する。	○叢書の出版、シンポジウムや展覧会の開催等による研究成果の積極的な社会への公開及び還元	<u>小項目評価</u> ○各学部等において、次のとおり研究成果の積極的な公開及び還元に取り組んだ。 【取組実績】 ・国際学部及び国際学研究科では、紀要「広島国際研究」第 24 巻を、国際学部叢書第 9 巻『複数の「感覚・言語・文化」のインターフェース—境界面での変化と創造に関する新しい見方』をそれぞれ刊行し、研究成果の普及を図った。また、公益財団法人広島平和文化センターなどが主催する講演会での講演や、県内高等学校や小中学校に講師を派遣するなど多様な活動を行った。 ・情報科学部及び情報科学研究科では、本学と県立祇園北高等学校による高大連携事業を実施し、理数コースの 40 人の学生が本研究科で研究開発中の「草の根情報伝搬システム」のフィールド実験に参加した。 ・芸術学部及び芸術学研究科では、展覧会の開催などにより、研究成果の発表を積極的に行った。教員による研究発表活動は、個展 16 件、学会発表 5 件、企画展 6 件、グループ展への出展 94 件、団体展への出展 20 件となった。また、学生による研究発表活動は、グループ展への出展 68 件（参加学生数 345 人）、個展 12 件、公募、団体展への出展 9 件となった。 ・広島平和研究所では、講演会、公開講座、シンポジウム等の企画及び実施、出版活動などに取り組んだ。連続市民講座、国際シンポジウム（テーマ：平和への扉を開く—核兵器禁止条約と、これから）、研究フォーラム（6 回）を開催するとともに、広島平和研究所開設 20 周年記念事業として、大学生、大学院生、公務員及びメディア関係者を対象とした「ヒロシマ平和セミナー2018」などを実施した。また、出版活動としては、紀要第 6 号、ニューズレター第 21 巻第 1 号及び第 2 号、HPI ブックレット第 6 巻を刊行したほか、「アジアの平和と核—国際関係の中の核開発とガバナンス」を刊行した。	b	【評価理由】 研究成果の積極的な公開及び還元のための取組を計画どおり着実に実施したと認められることから、「B」と評価した。 〔コメント〕 ○堅実に遂行している。 ○アウトカムが見えてきていない。 ○国際学部研究科の叢書・紀要の刊行、情報科学部研究科の産学連携発表会への出展特許出願・受託研究、芸術学部研究科の個展・公募展への出品、広島平和研究所でのシンポジウム・講演会・公開講座などに積極的に参加している。これらは地道な積み重ねと社会に対する主張が必要であり、積極的な活動と意欲が要求され対外的にも大学としての評価につながる重要な項目である。	B

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
4 社会貢献に関する目標 教育研究成果を社会に還元するため、社会連携センターを中心的な窓口として、学外研究機関、企業、NPO、地域コミュニティ等との交流及び連携を積極的に推進する。 また、広島都市圏の「知」の拠点として、提言、施策立案、技術供与等を通じて、地域行政課題の解決及び都市機能の強化に貢献する。 さらに、広く市民に生涯学習の場を提供するため、公開講座の充実等を図る。	4 社会貢献（大項目）		以上のように、「研究成果の積極的な公開及び還元」について、計画に掲げる取組を着実に実施したことから、「b」と評価した。			
			大項目評価 ○公開講座の充実等による市民の生涯学習ニーズ等への対応 ・幅広い世代の生涯学習ニーズ等に対応し、また、他大学とも連携して、引き続き、様々な公開講座・セミナー等を実施し、多数の市民が参加した（県立広島大学との連携公開講座、COC+高校生のためのサテライト講座、市大英語eラーニング講座、高校生による情報科学自由研究、ひろしまコンピュータサイエンス塾、芸術学部サマースクールや社会人向け公開講座など）。また、新たに、広島市教育委員会と連携し、広島中等教育学校の生徒がeラーニングによる英語学習を行えるよう、本学が開発したシステムと教材の提供を開始した。 ○地域、行政機関、企業など社会との連携の推進 ・「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」においては、引き続き、関連事業に精力的に取り組み、アートプロジェクトを6地域において実施し、芸術学部全10専攻の学生・教員155人が参加したほか、「大学連携による学生の観光研究・活動発表会」の開催、観光関連データベースの試験的運用などを実施した。 ・行政機関・企業等からの要請・連携の下、地域展開型の芸術プロジェクトを意欲的に実施（40件）したほか、浅野氏入城400年記念事業の一環として行った肖像画の復元制作、安佐動物公園で長寿世界一を記録したクロサイ「ハナ」の実物大モニュメントの制作などを実施した。また、教員・学生が自主的に社会貢献事業に取り組む「社会連携プロジェクト」（9件）や「市大生チャレンジ事業」（6件）を引き続き実施した。 ・平和な世界の創造に向けより一層貢献していくため、公益財団法人広島平和文化センターとの協定を見直し、平和の推進や国際交流・協力に関し有機的に連携協力することを内容とする包括的連携協力協定を締結した。また、学生・教職員の活動の活性化を目的として、新たに、本学の玄関口に当たり学生が多く居住する横川地区にあるNPO法人与相互協力協定を締結した。 以上のように、優れた取組を実施したことから、「a」と評価した。		a	〔評価理由〕 社会貢献全般について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
	<u>(1) 生涯学習ニーズ等への対応（小項目）</u> 幼児から社会人まで幅広く市民の生涯学習ニーズ等に対応した公開講座等を開催する。	○小中高校生、市民、企業の技術者・研究者等を対象にした公開講座等の実施	小項目評価 ○以下のとおり、公開講座等を実施した。 【開催実績】 ①県立広島大学との連携公開講座 ・ひろしま学を考える（延べ受講者数 227 人） ・言語を通じて世界を知る（延べ受講者数 185 人） ②国際学部公開講座 ・朝鮮半島を知る一核問題・安全保障・国づくりー（延べ受講者数 83 人） ・難民問題と交差する視線（受講者数 110 人） ③情報科学部公開講座 ・高校生による情報科学自由研究（受講者数 85 人） ・講演会（受講者数 18 人） ④芸術学部公開講座 ・一般向け（日本画、油絵、版画、彫刻、視覚造形、染織造形）（受講者数 93 人） ・サマースクール（日本画、油絵、彫刻、デザイン工芸）（受講者数 97 人） ・社会人向け工芸・版画技能講座（金工、染織、版画）（受講者数 7 人） ・社会人向け工芸・版画技能講座夏季特別講座（金工、染織、版画）（受講者数 4 人） ⑤市大英語 e ラーニング講座 ・第 1 期～第 3 期（受講者数 98 人） ⑥COC+高校生のための広島市立大学サテライト講座（山口県柳井市で実施） ・私のアートとアートディレクション、そのコンセプト（受講者数 20 人） ・歩き方からわかること～個人認証から心身状態の推定まで～（受講者数 19 人） ・アフリカ地域研究入門～フィールドワークによりマサイの暮らしを考える～（受講者数 14 人） また、情報科学部では、児童及び生徒を対象とした教育活動として、次の事業に取り組んだ。 【取組実績】 ①ひろしまコンピュータサイエンス塾	a	〔評価理由〕 生涯学習ニーズ等への対応について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。 〔コメント〕 ○依然として活発に活動が展開されている。 ○広島コンピュータサイエンス塾への市民参加、芸術学部サマースクールへの児童生徒を対象にした公開講座等による生涯学習ニーズへの対応が順調に充実してきている。 ○連携公開講座や、芸術学部の一般向け公開講座など特色のあるイベントを多数行っており、社会貢献度は高い。	A

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
				・小学生向けには、青少年のための科学の祭典などに出展した。 なお、中学生向けに実施を予定していた「プログラミング講座」については、台風 12 号の接近に伴い、中止とした。 ②グローバルサイエンスキャンパス（広島大学との連携事業） ・平成 29 年度から継続して 2 人のジャンプステージの高校生を受け入れるとともに、新たに 6 人のステップステージの高校生を受け入れた。そのほか、情報分野に関するセミナーを実施した。 ③広島県科学セミナー（広島県教育委員会との共催） ・高校生 220 人が参加し、67 人のポスター発表が行われた。本学から、指導助言者及び審査員として教員 10 人が参加するとともに、広島県高等学校教育研究会理科部会との共催で高校教員を対象とした研修会において、本学教員が講演を行った。 また、広島市立広島中等教育学校の全校生徒約 720 人が e ラーニングを利用した英語学習を行えるよう、本学が開発したシステムと教材を提供したほか、5 年生 40 人が本学を訪問し、英語による講義と留学生 2 人との英語による交流会を実施した。 以上のように、「公開講座の充実等による市民の生涯学習ニーズ等への対応」について、優れた取組を実施したことから、「a」と評価した。		
	<u>(2) 社会との連携の推進（小項目）</u> ア 「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」を推進し、広島都市圏の活性化につながる教育研究活動を実施することにより、地方創生に貢献する。 イ 社会連携センターを窓口として、広島市をはじめとした行政機関、企業等からの受託研究、共同研究等に積極的に取り組む。	○事業協働機関による協議会等の開催、観光関連データベースの運用 ○受託研究・共同研究等の実施、展示会開催・出展による研究成果の PR	小項目評価 ○次のとおり、COC+事業の実施に取り組んだ。 【取組実績】 ・平成 30 年 7 月に開催された外部評価委員会（教育、調査研究、観光、芸術の各分野の有識者で構成）において、「A：計画を上回った実績を上げている」との評価を得た。 ・観光関連データベースについては、学内で試験的に運用を開始し、「観光情報学」で教材とした。また、利用規定を含めたマニュアルを作成するとともに、事業協働機関の参加校や自治体への閲覧、活用を促した。 ・アートプロジェクトでは、6 地域において、芸術学部の全 10 専攻の学生及び教員が参加した（参加者：155 人）。 ・「ICT による観光情報を活用した観光振興―その事例と展望」をテーマに COC+フォーラムを開催した（参加者 67 人）。	a	〔評価理由〕 社会との連携の推進について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。 〔コメント〕 ○6 地域で行われた COC +アートプロジェクト等の地域との連携、広島平和文化センターとの包括的連携協力協定等の行政機関との連携、企業との連携も順調に充実しており地域に根ざした活動が行われている。 ○COC+事業については大きな実	A

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
	ウ 地域社会との連携を通じた地域展開型の芸術プロジェクトを推進し、芸術の社会的有効性を発信する。 エ 学生及び教職員の社会貢献活動及び地域との連携事業を支援する。	○COC+アートプロジェクトをはじめとした地域展開型の芸術プロジェクトの実施 ○学生及び教員の実施する広島市や地域等との協働事業の支援		①長崎大学 COC+観光活性化支援システム（長崎県の事例） 講師：一藤裕（長崎大学 ICT 基盤センター准教授） ②広島市立大学 COC+サイクリストの行動情報を利用した観光振興（しまなみジャパンの事例） 講師：植松敏美（広島市立大学社会連携センター特任助教） ③観光予報プラットフォームを利用した中小事業者の生産性向上の取組等（伊勢で 100 年続く老舗飲食店ゑびやの事例） 講師：森岡順子（公益社団法人日本観光振興協会） ④DMO ネットによる観光地マーケティング（秩父地域おもてなし観光公社の事例） 講師：菅野正洋、渡邊一樹（観光庁観光戦略課） ・「大学連携による学生の観光研究・活動発表会」を開催し、全 12 テーマの発表があった。終了後のアンケート調査では、学習・研究上の刺激の度合いについて「非常に触発された」、「触発された」の合計が 96%になるなど、学生の観光に関する学習・研究意欲の高まりに効果を上げた（参加大学数 7 大学、学生数 64 人、教員数 21 人）。 ・事業協働機関（参加校、自治体、経済団体）での連絡会議や、協働協議会を開催し、平成 30 年度事業実施状況の報告や、平成 31 年度事業計画案について意見交換する場を設けた。 ○受託研究・共同研究等の実施、展示会開催・出展による研究成果の PR に向けて以下のとおり取り組んだ。 【取組実績：（ ）は平成 29 年度実績】 ・受託研究、共同研究：58 件（60 件） 研究費計：98,034 千円（91,982 千円） ・補助金：2 件（4 件） 研究費計：46,526 千円（64,707 千円） ・奨学寄附金：12 件（11 件） 研究費計：14,184 千円（9,694 千円） また、受託研究・共同研究等を推進するため、研究成果の PR、社会連携コーディネーターによる技術相談などを実施した。 ・9 月：産学連携研究発表会の実施（来場者数：160 人） ・11 月：地域貢献事業発表会の実施（来場者数：130 人） また広島県水産海洋技術センターと共同で「瀬戸内の魅力」を発信するヴァーチャル・リアリティ技術（360 度カメラでの水中撮		績を上げている。 ○芸術学部及び芸術学研究科による地域展開型の芸術プロジェクトも極めて充実している。 ○堅実に遂行しているように感じる。 ○COC+からの発展が多様に見られる。 ○「再掲」を除いても十分優れている。

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
				影の技術）を開発したほか、西国街道に設置するデザインマンホールふたのデザイン制作、認知症高齢者見守り事業に係る QR シールのマークデザイン制作を行った。 ○芸術学部及び芸術学研究科では、地域との連携による地域展開型の芸術プロジェクトを意欲的に実施した。COC+アートプロジェクト 10 件の他、企業とのコラボレーションを含む 8 件の地域展開型のプロジェクト、その他のプロジェクトとして 22 件、計 40 件のプロジェクトを展開した。 【主なプロジェクト】 ・COC+アートプロジェクトでは、宮島^{ろくろ}轆轤の後継者育成を目指す「宮島ものづくり産業復興プロジェクト」＜廿日市市＞、NHK 広島放送局と学生との協働による記録映像制作「広島ピースプロジェクト」＜広島市＞、マンホールデザインプロジェクト」＜広島市＞、「安芸太田染織プロジェクト」＜安芸太田町＞、「尾道風景画プロジェクト」＜尾道市＞などを実施した。 ・「基町プロジェクト」では、4 回目となる「基町、昔写真展」を開催したほか、「土曜の先生」講座の継続的な実施、基町小学校での版画のワークショップなどを行った。 その他、浅野氏入城 400 年記念事業の一環として、肖像画（模写）の復元制作、安佐動物公園で長寿世界一を記録したクロサイ「ハナ」の実物大モニュメント制作、香川県小豆島町と連携した「三都半島アートプロジェクト」など県内外での活動を積極的に実施した。 また、広島市内や呉市内の病院と連携して、病院内環境の充実と芸術家育成を目的とした、「国立病院機構呉医療センター・中国がんセンター芸術賞」（呉海軍病院開設 130 年記念行事）、「広島赤十字・原爆病院賞」、社会医療法人清風会と連携した「清風会芸術奨励作品展」を行った。 ○平和な世界の創造に向けより一層貢献していくため、公益財団法人広島平和文化センターとの協定を見直し、平和の推進や国際交流・協力に関し有機的に連携協力することを内容とする包括的連携協力協定を締結した。また、学生・教職員の活動の活性化を目的として、新たに、本学の玄関口に当たり学生が多く居住する横川地区にある NPO 法人と相互協力協定を締結した。 さらに、教員及び学生の実施する事業を支援するため、社会連携		

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
				プロジェクト及び市大生チャレンジ事業を実施し、以下の成果を得た。 【取組実績】 ◎社会連携プロジェクト（教員の社会貢献活動に対して 1 件当たり 100 万円を限度に事業費を支援する制度） 件数：9 件（平成 29 年度：8 件） ・しまなみ観光サイクリストの行動情報収集プロジェクト ・「三都半島アートプロジェクト 2018-けしきのかたち-」 ・柳井プロジェクト ・瀬戸内の魅力発信プロジェクト・バーチャルリアリティー編 ・本学若手教職員による光の作品「Lights」の展示 ・大学間連携による教育プログラム「ひろしま医工学スクール」 ・広島の文化財（美術）を学ぶ教育プロジェクト-三原市・佛通寺所蔵「雲谷等顔筆 襖絵」を教材として ・地域資源の撮影を通じた写真映像コンテンツ編集・発信能力の開発 ・尾道市立大学と連携したアーティストによる空き家再生事業を軸に、観光振興による地域創生に向けた人材育成事業 ◎市大生チャレンジ事業（学生の社会貢献活動に対して 1 件当たり 15 万円を限度に事業費を支援する制度） 件数：6 件（平成 29 年度：4 件） ・市大生によるパソコンなんでも相談室 2018 ・広島の中学・高校生を対象としたプログラミング教室 ・ヒロシマピースキャンプ 2018 ・横川プロジェクト ・情報化社会に対する興味を深めよう ・写真作品とカメラのワークショップを通した基町アパートの地域活性化 そのほか、広島市立広島中等教育学校の 4 年生を対象に実施した「英語教育リサーチスクール」に留学生 4 人を派遣したほか、広島市立大塚中学校が生徒に英語を使う場を提供するために実施した「イングリッシュ・デイ」に留学生 5 人を派遣した。 以上のように、「地域、行政機関、企業など社会との連携の推進」について、優れた取組を実施したことから「a」と評価した。		

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
5 国際交流に関する目標 グローバルな知見を得るとともに、大学の国際化を推進するため、学生及び教員の国際交流を積極的に推進するとともに、留学生への支援の充実を図る。	5 国際交流（大項目）		大項目評価 ○学術交流及び学生交流による国際交流の推進 ・学術交流協定大学の開拓に積極的に取り組み、新たに、4 大学（ケベック大学モントリオール校（カナダ）、コンコルディア大学（カナダ）、蘇州大学（中国）及び上海大学（中国））と協定を締結し、学術交流・学生交流による国際交流の範囲がさらに広がった。 ・学術交流協定大学との交換留学や短期留学プログラム（短期語学プログラム・海外交流プログラム）を推進し、派遣・受入留学生の数は中期計画に掲げた数値目標（192 人）を上回る 203 人となった（平成 29 年度 196 人）。 ・平成 30 年 4 月に開寮した国際学生寮においては、学生役職者が中心となって寮運営を担い、地域の祭りへの参加や学生同士の交流事業を実施したほか、短期プログラムで訪れた海外の学生との交流会を行うなど、開寮によって、留学生受入れ機能とともに、日本人学生・留学生に対する教育機能が格段に向上した。 ○日本人学生及び留学生への支援の充実 ・日本人学生の留学支援として、引き続き短期留学プログラム参加者に対する助成を行った。また、留学生支援として、特別聴講学生を対象としたホームステイプログラムや小学生との交流事業を実施した。 ・海外で起こりうる事件・事故等の危機対応を学ぶための危機管理シミュレーション訓練等を実施した。 以上のように、特に優れた取組を実施したことから、「s」と評価した。	s	〔評価理由〕 国際交流全般について特に優れた取組を実施したと認められることから、「S」と評価した。	S
	(1) 国際交流の推進（小項目） 言語、地域、学術分野等を踏まえた海外学術交流協定大学の戦略的な開拓、短期留学プログラムの新規実施等により、学術交流及び学生交流を推進する。平成 33 年度までに、派遣・受入留学プログラム参加学生数を年間 192 人（平成 26 年度 96 人）にする。	○海外学術交流協定大学等の戦略的な開拓、短期留学プログラム等の実施	小項目評価 ○学術交流協定大学等の開拓について、ケベック大学モントリオール校（カナダ）、コンコルディア大学（カナダ）、蘇州大学（中）、上海大学（中）と新たに協定を締結し、学術交流・学生交流による国際交流の範囲がさらに広がった。 留学プログラム等については、学術交流協定大学との交換留学や、短期留学プログラム（短期語学留学プログラム及び海外交流プログラム）を推進した結果、派遣・受入を合わせたプログラム参加学生数は、中期計画に掲げた数値目標 192 人を上回る 203 人となった（平成 29 年度 196 人）。	s	〔評価理由〕 国際交流の推進について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。 〔コメント〕 ○国際交流の範囲の拡大は喜ばしい。 ○学術交流協定大学では新たに協定の締結と交換留学、短期留学プログラムの推進、国際学生寮「さくら」の活用など	A

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	記号
			【取組実績】 ・派遣学生数：83 人 長期派遣：ハノーバー専科大学（ドイツ）、上海大学（中）、オルレアン大学（フランス）など 10 校へ 24 人 短期派遣：ハワイ大学（アメリカ）、オルレアン大学（フランス）、モスクワ国立大学（ロシア）など 7 校へ 59 人 ・受入学生数：120 人 長期受入：西南大学（中）、ハノーバー専科大学（ドイツ）、レンヌ第 2 大学（フランス）など 7 校から 21 人 短期受入：慶北国立大学（韓）、ルーサーカレッジ（アメリカ）及び「HIROSHIMA and PEACE」等の参加者 99 人 教職員交流について、ハノーバー専科大学（ドイツ）において、情報科学研究科教員 1 人が長期研修を行ったほか、本学副学長ほか 6 人の教職員が同大学を訪問し、講演や講義、ワークショップなどを実施するとともに、現協定の成果の検証等を行ったほか、西南大学（中）に、本学情報科学研究科の教員 6 人が訪問し、交流に関する意見交換を行った。 以上のように、「学術交流及び学生交流による国際交流の推進」について、特に優れた取組を実施したことから、「S」と評価した。		優れた取り組みが行われている。 ○国際交流がようやく本格化してきた。しかし、まだ満足すべきでない。 ○海外 22 校の大学との学術交流協定が結ばれ、有意義な学術交流及び学生交流が積極的に行われている。実際に 203 名の派遣・留学生の交流があり、有効な国際交流が行われているものと評価できる。特に生活面も含めた実質的な交流もできる学生寮「さくら」での教員と学生の自主運営による交流が活性化している点は特出している。	
	<u>(2) 日本人学生及び留学生への支援の充実（小項目）</u> ア 国際学生寮の整備を推進し、施設を活用した多様な交流を促進する。 イ 日本人学生の派遣及び留学生の受け入れに係る支援の充実を図る。	○国際学生寮の開寮、国際学生寮を活用した多様な交流事業の実施 ○日本人学生の派遣及び留学生の受け入れに係る支援策の実施	<u>小項目評価</u> ○平成 30 年 4 月に国際学生寮を開寮し、教職員の支援の下、学生役職者を中心とした企画・運営を担い、以下のとおり交流事業を実施した。 【取組実績】 ・4 月：新入寮生歓迎会（Welcome party） ・6 月：スポーツ大会、バーベキューの実施 ・7 月：「大塚・伴南ふれあい祭り」への参加 ・7 月～：災害による通学困難学生の受入れ ・8 月：「HIROSHIMA and PEACE」参加学生との交流、マレーシア科学大学との交流会、多国籍料理パーティー ・10 月：新入寮生歓迎会（ハロウィンパーティ） ・12 月：シンガポール国立大学との交流会 ・1 月：慶北国立大学校（韓）との交流会、新年交流会（地域	a	【評価理由】 日本人学生及び留学生への支援の充実について特に優れた取組を実施したと認められることから、「S」と評価した。 〔コメント〕 ○様々な企画を行っており評価できる。 ○日本人学生への短期留学プログラムや留学生へのホームステイプログラムの支援や、地域の小学生との交流等きめ細かい国際交流の支援が充実しておりこの分野での評価は非	S

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
第 3 業務運営の改善 及び効率化等に関する目標 1 業務運営の改善及び 効率化に関する目標	第 3 業務運営の改善及び効率 化等に関する目標を達成する ためとるべき措置 <u>1 業務運営の改善及び効率化 （大項目）</u>		住民も参加） ・ 2 月：送別会（Farewell party） ・ 3 月：他大学の国際学生寮生との交流会 ○次のとおり、日本人学生の派遣及び留学生の受入に係る支援を行 った。 【取組実績】 ・ 短期留学プログラム（短期語学研修プログラム、海外交流プ ログラム）参加者に、以下のとおり助成金を支給した。 〔支給内訳：短期語学研修プログラム 37 人 2,725,000 円、 海外交流プログラム 22 人 187,500 円（計 59 人 2,912,500 円）〕【平成 29 年度：67 人 2,102,500 円】 ・ 特別聴講学生を対象とした日本の生活・文化の体験支援策と して、ホームステイプログラムを実施し、4 月に 3 人、10 月 に 8 人の特別聴講学生が地域住民の家で 1 泊 2 日のホームス テイを行ったほか、特別聴講学生等を対象とした日本の生 活・文化の体験支援策として、2 月に 3 人の留学生が石内北 小学校を訪問し、小学生との交流を行った。 ・ 教職員を対象とした危機管理意識の向上支援策として、民間 企業の協力の下、海外において学生に起こりうる事件・事故 等の危機対応を学ぶための危機管理シミュレーション訓練 を実施したほか、留学する学生を対象とした危機管理セミナー を 2 回実施した。 以上のように、「日本人学生及び留学生への支援の充実」につい て、優れた取組を実施したことから、「a」と評価した。		常に高い。 ○国際交流活動を拡大するう えで、危機管理体制の充実には 一段と留意されたい。	
			大項目評価 ○機動的かつ効率的な運営体制の構築 ・平和学研究科設置に向け優れた業績を有する教員を採用したほか、 IR に本格的に取り組むため、IR 担当教員の採用を決定した。また、 法人事務職員（プロパー職員）の採用について、広島市と協議の 上、平成 31 年 4 月から 3 人採用することを決定した。 ・新任教職員研修をはじめ、科研費獲得研修会や障害者差別解消法 に関する研修など、FD・SD 研修会等を開催したほか、事務マニユ	b	【評価理由】 業務運営の改善及び効率化の ための取組を計画どおり着実に 実施したと認められることか ら、「B」と評価した。	B

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
			アルの点検・更新など内部統制システムの充実に取り組んだ。 ○社会に開かれた大学づくりの推進 ・「マツダ・広島市立大学芸術学部共創ゼミ」を引き続き開講したほか、動物園や神社からの依頼による制作などを行った。 ・教員の教育・研究実績等を社会に広く公開するため、教員システムへの研究実績等の入力を徹底するとともに、新たに、「ファカルティ・レポート」を発行した。 ・広報活動として、新たに英語版「大学紹介ビデオ」を作成したほか、ウェブサイトへのアクセスしやすさをめざし「ウェブアクセシビリティ方針」を策定し、改善の取組を始めた。また、オリジナルグッズの開発に取り組み、新たに「オリジナル腕時計」など 7 アイテムを制作した。 ○自己点検及び評価による大学運営の改善並びに評価に関する情報の公開 ・個々の教員における質保証をめざし、新たに「教員活動における自己点検・評価シート」による取組を始めたほか、各部局等の PDCA 機能の充実にめざし、各部局等の自己点検・評価の仕組みを検討し、平成 31 年度から実施することとした。 ○施設・設備の効率的な維持管理、教職員の服務規律の確保等その他業務運営の改善 ・施設・設備の効率的な維持管理のため、「広島市立大学保全（長寿命化）計画」について見直しを行ったほか、将来的な大規模保全工事に備えた広島市からの技術支援について広島市と合意し、緊急時における施設改修工事が対応可能となった。 ・教職員の安全衛生管理等を図るため、ストレスチェックや防火防災訓練などを着実に実施するとともに、敷地内全面禁煙に向けた取組を進めた。また、服務規律を確保するため、倫理研修等を実施した。 以上のように、計画に掲げる取組を着実に実施したことから、「b」と評価した。			
(1) 機動的かつ効率的な運営体制の構築 質の高い教育研究が継続的に推進されるよう、中長期的か	(1) 機動的かつ効率的な運営体制の構築（小項目） ア 本学の特色を生かした教育研究を推進するため、全学的かつ中長期的視点から	○全学人事委員会における教員の戦略的かつ機動的な任用・配置	小項目評価 ○教員の戦略的かつ機動的な任用・配置に取り組んだ。 人事委員会での審議を着実に重ね、採用方針が決定している常勤教員 12 ポスト中 11 人の任用を決定し、そのうち 2 人については 10 月から任用を開始した。	b	〔評価理由〕 機動的かつ効率的な運営体制の構築のための取組を計画どおり着実に実施したと認められることから、「B」と評価した。	B

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等 記号
つ経営的視点から、幅広い人事体制の確保並びにコスト意識を持った業務改善及び効率化により、機動的かつ効率的な大学運営を行う。 また、社会経済環境の変化に即応する経営を担保する観点から、学外専門家の一層の活用を図る。	教員を戦略的かつ機動的に任用・配置する。 イ 事務の継続性及び職員の事務処理能力の専門性を高め、効率的かつ安定的な運営体制を構築するため、中長期的視点から職員を任用・配置する。 ウ 研修の充実等により、職員の能力向上を図る。 エ 教育、学生支援、大学運営等の質の向上を図るため、IR（Institutional Research：学内の様々な情報を収集・分析し、大学業務の質の向上に活用することをいう。）を導入する。 オ 大学運営の効率化及び質の向上を図るため、学内外の多様な意見を活用しつつ、運営組織の在り方及び事務処理の内容・方法について定期的に点検し、必要に応じて改善を行う。	○プロパー職員の任用、育成及び評価、今後の採用方針等に関する広島市との協議 ○公立大学職員セミナーへの参加、新規配属職員研修・各室等が主催する業務研修等の実施 ○IR の試行実施及び各種システムの更新に向けた準備 ○運営組織の在り方や事務処理の内容・方法の点検・改善	特に、平成 31 年度の平和学研究科の設置に向けて、優れた実績のある教員を確保するため、引き続き積極的に活動を行い、平成 30 年 4 月から 1 人、10 月から 1 人の任用を開始するとともに、平成 31 年 4 月から 2 人の任用を決定した。 ○法人事務職員（プロパー職員）の計画的な任用について、広島市と継続的に協議し、10 月から公募試験及び無期雇用職員登用試験を実施し、平成 31 年 4 月から法人事務職員を新たに 3 人採用することを決定した。 また、平成 30 年度に採用した 3 人の職員を一般社団法人公立大学協会及び広島市の研修に積極的に参加させるとともに、人事評価体系について、広島市職員の事例に基づき、要綱・要領を作成し、評価を実施した。 ○FD・SD 研修会等を実施し、職員の能力向上に取り組んだ。また、一般社団法人公立大学協会が主催する研修へ 11 人を派遣した。 特に、法人として、平成 30 年度に初めて採用した法人事務職員（3 人）については、広島市が実施する文書事務研修や法制執務講座などへの派遣を積極的に行った。 【FD・SD 研修会実績】（主なもの） ・4 月：新任教職員研修 ・7 月：科研費獲得研修会（参加者 72 人） ・9 月：職員倫理研修（参加者 117 人） ・11 月：情報セキュリティ研修会（参加者 79 人） ・11 月：アクティブ・ラーニング研修会（参加者 63 人） ・12 月：安全保障管理セミナー（参加者 34 人） ○IR の本格導入に向け、平成 31 年度実施予定の各種システムリリースにおいては、IR に対応可能となるような仕様とするための調整を行った。 入試、学業成績、就職状況等の各種データの収集、整理及び分析等を行い、内部質保証の強化を図るとともに、IR の本格実施に向けた企画・調整を行うため、IR を担当する特任教員の採用について公募し、平成 31 年 4 月から着任することが決定した。 IR の実施に向けては、IR に関する学内データの収集と学内で実施されているアンケートの見直し・集約を行い、アンケートに関する実施方針を定め、周知するとともに、内部質保証委員会において、平成 31 年度からの IR の実施について実施方針を明確化した。			〔コメント〕 ○多様化する大学運営に対し、優秀な教員と事務職員の確保は必須条件であり平和学研究科設置に向け効率的な人事が期待される。 ○機動的に行動している。 ○近年、大学の研究・教育活動等が従前と比べて格段に多様化する中で、職員についても特定分野における高度な事務処理能力（例えば国際交流の支援）が求められる。職員の任用や研修にも様々な工夫が求められるであろう。

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
(2) 社会に開かれた大学づくりの推進 教育研究成果の積極的な広報及び大学ブランドの向上に向けた戦略的な情報発信の強化により、社会に開かれた大学づくりを推進するとともに、地域のニーズ等を的確に把握し、教育研究等への反映を図る。	(2) 社会に開かれた大学づくりの推進（小項目） ア 地域の企業・自治体等との積極的な連携・交流を通じて地域のニーズを的確に把握し、教育研究活動への反映等に取り組み、社会に開かれた大学づくりを推進する。 イ 教育研究等の実績の積極的な公開等により、教員活動の活性化と社会への説明責任を果たす取組を推進する。 ウ 魅力的で利用しやすいものとするため、ウェブサイトのリニューアルを行うとともに、英語版ウェブサイトをはじめとするコンテンツの充実に取り組む。また、多様なメディアの相互活用により、効果的かつ魅力的な広報を展開する。	○各種連携・交流事業等を通じた地域のニーズの把握と教育研究等への反映 ○教員の教育・研究実績の公開状況の点検・修正、ファカルティ・レポート（教員業績集）の発行 ○ウェブサイト等の見直し・改善、映像コンテンツ等の活用	○法人の設置団体である広島市への組織・人員要求の機会をとらえ、運営組織の在り方について点検したほか、事務マニュアルについて、平成 29 年度に引き続き、新規事務事業に係るものの作成及び既作成分の点検・更新を実施し、より完成度の高いものとした。 また、新入教員（11 人）を対象に、適正な事務執行に係る研修を実施した。 さらに、学生支援室長を講師として、障害者差別解消法及び学生支援に関する研修会を実施し、修学上の配慮などについて理解を深めた。 以上のように、「機動的かつ効率的な運営体制の構築」について、計画に掲げる取組を着実に実施したことから、「b」と評価した。			
			小項目評価 ○新たなものづくりができる人材を育成することを目的に開設した「マツダ・広島市立大学芸術学部共創ゼミ」において、2 年目となる平成 30 年度は、道具のデザインを意識させた教育プログラムとし、8 人の学生が参加した。その成果作品を芸術資料館で公開展示し、成績優秀者への授賞式を行った（最優秀賞、優秀賞各 1 人）。 また、本学芸術学部と広島市安佐動物公園、広島ニューライオンズクラブが連携し、動物公園正門前にクロサイの「ハナ」をモデルとした、サイのモニュメントを設置した。 さらに、浅野氏入城 400 年記念事業の一環として、本学日本画研究室が浅野家ゆかりの饒津神社からの依頼で浅野長晟公の肖像画（複写）制作を行った。 ○教育・研究実績等の積極的な公開等に資するためのツールの一つとして、引き続き教員システムを着実に運用し、全教員に対し、教員システムへの研究実績の入力を徹底するよう周知した。また、本学として初めてとなるファカルティ・レポートを作成し、ウェブサイト等で公表を行った。 さらに、個々の教員における「質保証」を図るため、全教員を対象とした年度計画作成と自己点検を実施することとし、「教員活動における年度計画・自己点検結果シート」を新たに作成した。作成したシートは、部局内での共有を図った。 ○効果的かつ魅力的な広報を展開するため、以下のとおり取り組ん		a	〔評価理由〕 社会に開かれた大学づくりの推進について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。 〔コメント〕 ○大学の活動が、①社会から見える、②社会に提供されている。 ○「マツダ・広島市立大学芸術学部共創ゼミ」は面白い企画なので、今後も継続・発展できると良い。 ○企業との積極的な交流が行われており、その中から生まれてくる社会に開かれた大学作りが推進されてきている。マツダ・広島市立大学芸術学部共創ゼミ等の新しい発想が生まれ実施されてきた。その発想の延長として、大学独自のオリジナルグッズが誕生してきた。このような事案が業務

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
2 財務内容の改善に関する目標	エ 本学のブランドイメージの一層の浸透を図るため、コミュニケーションマーク等を用いた大学オリジナルグッズを開発し、活用する。	○記念品の制作、ワーキンググループでのノベルティー検討・制作、オリジナルグッズの増加	だ。 【取組実績】 ・平成 29 年度にリニューアルしたウェブサイトをより利用しやすいものとなるよう、教職員向けにアンケートを実施し、その結果をもとに改修を行った。 ・海外の学術交流協定大学等で活用するため、英語版の「大学紹介ビデオ」を作成し、映像コンテンツの充実を図った。 ・大学院入学者確保のため、大学院進学情報サイト「大学院へこう！」へ情報掲載を行った。 ・QR コード等の活用によりウェブサイトとの連携を図った「大学案内 2019」を発行した。 ・全てのウェブサイト利用者が、提供されている情報やサービスにアクセスし、コンテンツや機能を利用できることを目指し、「公立大学法人広島市立大学ウェブアクセシビリティ方針」を策定するとともに、教職員に対し概要説明を行い、改善の取組を始めた。 ○本学の特色を生かした記念品、オリジナルグッズの開発に取り組んだ。 本学のコミュニケーションマークをデザインした「オリジナルネックストラップ」や「オリジナル USB」を作成したほか、学生、教職員を対象に実施した写真コンテスト「画像投稿サイト」で最優秀作品に選ばれた写真をデザインした「オリジナル図書カード」、折り鶴再生紙を利用した「一筆箋風ノート」を作成した。 また、売店において「オリジナル腕時計」、「オリジナルプリント T シャツ」、芸術学部（染織造形）の学生が制作した「オリジナル染織 T シャツ」の販売を開始し、「オリジナル染織 T シャツ」については、完売となった。 以上のように、「社会に開かれた大学づくりの推進」について、優れた取組を実施したことから、「a」と評価した。			運営の改善にもつながる。
			大項目評価 ○多様な収入源の確保及び経費の適正かつ効率的な執行による財務内容の改善 ・教育研究等の充実を目的に創設した「広島市立大学基金」については、基金原資を増やすため広報活動を実施した。また、自己収入の増加に向け、古紙の売払収入など多様な収入の確保に努めた。		b	【評価理由】 財務内容の改善のための取組を計画どおり着実に実施したと認められることから、「B」と評価した。

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
(1) 自己収入の増加 教育研究環境を向上させるため、外部資金の積極的な獲得に取り組むなど、自己収入の増加を図る。 (2) 運営経費の見直し 質の高い教育研究が継続的に推進されるよう、経営的視点から、人員配置を含め、大学運営に関するあらゆる経費の見直し及び効率的な執行を図る。	(1) 外部資金の獲得、大学が保有する施設・設備の利活用の促進等により、多様な収入の確保に努める。また、同窓会等との連携の下、教育研究活動の充実等を目的とした「広島市立大学基金」（仮称）を創設する。 (2) 大学の持続的な発展のため、大学運営の恒常的な見直し・改善を通じ、教職員一人一人のコスト意識を高め、経費の適正かつ効率的な執行に努める。	○多様な収入の確保、寄附の状況等を踏まえた基金を増やすための活動等の検討・実施 				

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
3 自己点検及び評価に関する目標 自己点検、自己評価及び第三者機関による評価を定期的に実施することにより、大学運営の改善に努める。また、評価に関する情報を積極的に公開する。	3 自己点検及び評価（小項目） 自己点検及び評価の結果を大学運営の改善につなげるとともに、評価結果をウェブサイト等で積極的に公開する。また、内部質保証（高等教育機関が、自らの責任で自学の諸活動について点検・評価を行い、その結果を基に改革・改善に努め、それによって、その質を自ら保証することをいう。）の強化に取り組む。	○自己点検・評価の実施及び次年度計画等への反映、内部質保証の強化		教員研究費については、引き続き 3 年間を一つの単位として年度を越えた研究費の活用を可能とし、計画的かつ効率的に執行できるようにした。 平成 31 年度予算要求に当たっては、事務・事業の経費節減に向けた取組等により新規事業等の実施に必要な財源確保に取り組むとともに、限られた財源の有効活用を図る観点から、緊急性、重要性、経費対効果等を十分検討した上で予算要求を行うよう学内に通知した。 予算編成に当たっては、経常経費の 4%削減、研究用機器のリース料の原契約の 10%相当額削減などの徹底した経費節減に取り組み、約 8,700 万円を節減して中期計画の実現に向けた新規事業の実施などに係る財源を確保した。 さらに、経常的な業務全般について事務マニュアルを作成し、定期的に点検を行い、事務処理の内容及び方法について改善を図ることにより、的確かつ効率的な業務運営を図った。 以上のように、「多様な収入源の確保及び経費の適正かつ効率的な執行による財務内容の改善」について、計画に掲げる取組を着実に実施したことから、「b」と評価した。		
			小項目評価 ○自己点検・評価の実施及び次年度計画等への反映、内部質保証を強化するため、以下のとおり取り組んだ。 【取組実績】 ・内部質保証委員会において、当該年度に行う取組の実施計画及び大学認証評価結果における課題解決に向けた実施計画の作成及び平成 29 年度業務実績報告書を作成した。 ・個々の教員における「質保証」を図るため、全教員を対象とした年度計画作成と自己点検を実施することとし、「教員活動における年度計画・自己点検結果シート」を新たに作成した。作成したシートは、部局内での共有を図った。 ・教員の教育・研究実績等を広く公開するため、教員総覧（教員システム）への研究業績等の入力を徹底するとともに、「ファカルティ・レポート」を発行した。 ・平成 30 年 6 月に、高大接続改革に着実に取り組むため、3 つのポリシーを全体的に見直した。 ・PDCA サイクルを適切に機能させることを目的として、各学	b	〔評価理由〕 自己点検及び評価の実施のための取組を計画どおり着実に実施したと認められることから、「B」と評価した。 〔コメント〕 ○教員並びに各部局の自己点検・評価の実施とデータの分析・情報公開と共に学生からの意向調査の実施の検討も必要になってくる時代である。	B

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等 記号
4 その他業務運営に関する重要目標 (1) 施設及び設備の適切な維持管理等 快適なキャンパス環境を確保するため、既存の施設及び設備の適切な維持管理及び計画的な改修を行う。 (2) 安全で良好な教育研究環境の確保 学生及び教職員の安全衛生管理、人権及び法令遵守に関する意識の向上を図るとともに、災害等不測の事態に適切に対応できる体制の充実に取り組むことにより、安全で良好な教育研究環境を確保する。	4 <u>その他業務運営（小項目）</u> (1) 施設・設備の効率的な維持管理と長寿命化を図るため、「広島市立大学保全計画」（仮称）を策定し、計画的な維持保全に取り組む。 (2) 職場巡視、研修の定期的な実施等により、教職員の健康の保持増進及び安全衛生管理の向上を図る。 (3) 法令遵守及び各種ハラスメント等の防止に関する研修等の実施により、教職員の服務規律の確保を図る。 (4) 災害等不測の事態に適切に対応できるよう、危機管理マニュアルの点検・見直し等を行う。	○「広島市立大学保全計画」に基づく維持保全の実施 ○衛生管理者の養成、安全衛生管理研修・職場巡視等の実施 ○服務規律、ハラスメント、研究不正防止・研究倫理等に関する研修会等の実施 ○危機管理マニュアルの点検・見直し等の実施	部・研究科等において自己点検・評価シートを作成し、平成 31 年度から実施することを決定した。 以上のように、「自己点検及び評価による大学運営の改善並びに評価に関する情報の公開」について、計画に掲げる取組を着実に実施したことから、「b」と評価した。			
			<u>小項目評価</u> ○次のとおり、施設・設備の維持保全に取り組んだ。 【取組実績】 - 国際学部棟個別空調機の大規模更新に係る契約を計画どおりに締結し、更新を完了した。 - 施設全体の屋上防水の劣化が進行しているため、特に深刻な講義棟、芸術学部棟の雨漏り箇所から重点的に修繕した。 - 不具合の確認されている高圧受電設備の維持保全を含む、基幹設備の機能回復修繕を多数実施した。 - 大学施設内の要改善箇所について、低廉な価格での一般修繕を多数実施し、体育館照明設備の不点灯解消及び附属図書館・語学センター正面扉の自動化、正面案内板再生等を実施した。 - 施設内の福祉環境整備のため、正面大階段等に手すりを設置した。また、主要扉の自動化に取り組んだ。 - 電気受給契約の入札では、基本料金を引下げるため、契約電力を 100kWh 引き下げるとともに、デマンド監視装置による大型空調機器の監視体制を見直した結果、電気使用量を対前年度比 4.2%削減した。 - ガス空調機器の更新等により、都市ガスの使用量を対前年度比 9.5%削減した。 「広島市立大学保全(長寿命化)計画」について、所要の見直しを行った。 - 施設保全（長寿命化）計画に基づき、次期中期計画策定に向けた施設保全（長寿命化）実行計画の策定に着手し、施設大規模修繕サイクル案の見直し、及び将来的な大規模保全工事に備えた広島市からの技術支援について、広島市の関係部署と合意し、緊急時における施設改修工事が対応可能となった。 ○法令に基づき、教職員定期健康診断及び特殊健康診断を実施した（受診率 99.4%）。	b	〔評価理由〕 その他業務運営の取組を計画どおり着実に実施したと認められることから、「B」と評価した。 〔コメント〕 ○電気使用量を対前年度比 4.2%削減，都市ガスの使用量を対前年度比 9.5%削減などのコスト減に努めている。 ○施設や設備の維持管理は次第に大きな課題になってくる。その為の対策として作られた広島市立大学保全計画の見直しについては、地道に検討していかなければならない。 ○十分な実績を上げている。	B

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等
				衛生委員会については、平成 29 年度と同様に毎月 1 回の開催を継続するとともに、年 6 回の職場巡視、不用品の廃棄や整理整頓を徹底し、良好な職場環境の維持・向上に努めたほか、ストレスチェックを実施し、教職員が自らの心身の状態に気づけるようにし、高ストレス状態にあると判定された教職員については、産業医による個人面談の案内を行った。 また、ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）を推進するため、正規職員の増員（1 人）、業務改善・効率化の徹底、時間外勤務の削減について職員への定期的な注意喚起などを行った。 さらに、健康増進法改正に伴う受動喫煙対策について審議を重ね、敷地内全面禁煙に向け、学内の喫煙所を段階的に削減するとともに、働き方改革関連法の施行に伴い、教職員の労働時間を客観的に把握することを目的に、勤務状況等報告書を出勤時間等報告書と様式を改めるなど法令改正への対応を着実に実施した。 加えて、平成 30 年度の学部新入生に向け、「体育実技」及び「健康科学」の授業において一次救命講習・AED 講習を実施するとともに、教職員を対象とした一次救命講習・AED 講習を 2 回実施した（参加者 28 人）。 ○事務局等の全職員を対象に倫理研修を実施し、服務規律の確保を図った。 また、教職員全員を対象としたハラスメント防止等の講習会を開催し、不祥事防止に努めた。なお、他大学等における不祥事の事例を講習会において情報提供するとともに、ウェブサイトなどで報道された事例についても情報提供を行った。 研究倫理教育の一環として、新たに着任した教員及び研究費執行に関わる職員に対し、「研究倫理 e ラーニングコース」（日本学術振興会）の受講を徹底するとともに、研究倫理の啓発のため、パンフレット及びポスターを作成して周知した。 ○「危機管理カード」[災害対応マニュアル（事務局版）における、災害対応に係る準備体制及び危機対策本部設置基準を記載したカード] については、自身の参集時期や体制の設置基準に応じ、確実な参集が行われるよう、紙ベースでの発行に加えて、パワーポイント形式及び PDF 形式でも発行し、各職員が利活用しやすい形で提供するなど、充実を図った。 また、地震及び火災発生を想定した防火防災訓練を実施し、安佐南消防署職員の指導・講評を受けるとともに、安佐南消防署職員		

中期目標	中期計画	平成 30 年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価			評価委員会による評価	
			評価理由等		記号	評価理由・コメント等	記号
				を講師に迎え、教職員、学生を対象とした体験型研修会「水消火器を用いた消火訓練」の開催や、教職員を対象とした危機管理研修会「防火・防災管理」を開催した。 さらに、職員の海外渡航に係る危機管理マニュアルを施行し、危機管理カードを作成するとともに、常勤職員が業務又は研修のために海外渡航する場合に携行することとした。 以上のように、「施設・設備の効率的な維持管理、教職員の服務規律の確保等その他業務運営の改善」について、計画に掲げる取組を着実に実施したことから、「b」と評価した。			

広島市公立大学法人評価委員会 委員名簿

職 名	氏 名	現 職 等	備 考
委員長	平澤 洽	東京大学名誉教授	
委 員	石田 淳	東京大学教授	
委 員	下中 奈美	弁護士	
委 員	深見 希代子	東京薬科大学教授	
委 員	宮廻 正明	東京藝術大学名誉教授	